ユメアルキ

沢口　涼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ユメアルキ

【Ｎコード】
Ｎ４６９０Ｃ

【作者名】
沢口　涼

【あらすじ】
夢の世界のみで生き、その世界を自由に動かすことができる少女「朝比奈夢」と、その少女と夢の中で出会った、現実世界に対して無気力な少年「弐門歩」２人はお互いに徐々に惹かれあう。現実ではいつしか少女の夢の世界が様々な影響を出し始める。それを追う人物と、ただ流され抗う当事者達の物語

序章　朝比奈　夢

「いってきまーす」

彼女――

朝比奈夢（あさひなゆめ）は、真新しいセーラー服に身を包み、カバンを大事そうに抱えながら、朝食も早々に慌しく玄関を飛び出した。

暖かい日差しが全身を包み込み、駆け足で走り出した、時折吹くそよ風がその日差しの暑さを調和し気持ちの良い朝だった。

春とは多分こういったものだったのだろう、ふと思った。

春休みも終わり、今日からやっと中学生である。

正直小学校6年になった頃辺りからランドセルが嫌で、近所のよく見かける中学生のお姉さん達が着ている、制服のセーラー服や学生カバンに憧れていた。そんなささやかな願いが叶って、嬉さで足取りも軽かった。

セーラー服に身を包んだだけで、1歩大人の仲間入りが出来たと思った。

夢は肩で揃えた黒髪を風になびかせるように、これから自分が通うことになる中学校への道を駆ける。

朝だというのにその道は極端に人通りは少なかった、薄暗い細道という訳ではなく、大通りという訳でもないが、住宅地に面しているそれなりな道だ。

しかし、普段なら少ないながらも車通りや、近所のおばさんたちの井戸端会議、出勤途中のサラリーマン、そして自分と同じように各々の学校へと向かう者、それらの姿があって然るべきなのだが、今はその誰一人として見かけることはなかった。

静かな道、そこには何も無いかのように――

ただ、道があり家があるだけだった。

「おはよう」
暫く走っていくと、前をゆっくりとしたペースで歩いている自分と同じ制服を着ている少女を見かけたので、後ろから話しかける。
制服の少女は何も聞こえなかったかのように無反応で、勿論彼女から返事は帰って無い――
しかし夢はその制服の少女の横を、何事も無かったようにそのまま通り過ぎた。
制服を着た少女も、何の反応すら示さず、ただ黙々と変わらないスピードで歩いていた。
そのまま真っ直ぐ数百メートルほど住宅街を走ると、大通りの交差点が見え、徐々に走るペースを落とした。
横断歩道に差し掛かった辺りで夢は立ち止まる、信号は青だった。周りをきょろきょろと見る、しかし先ほどまでとほぼ同じように、車の通りや人影は一切見えなかった、後ろを振り返ってみたが同じように何も無かった。
なおも夢はその場に立ち尽くす。
「何か変……」
ぼそりと呟く。
確かに変だった、夢はふと考え込む。
(誰も居ない…)
(あれ…そういえばさっき話し掛けた子は…?)
後ろを振り返えりながら、暫く見つめる、だが誰もこちらへ来る様子は無かった。
(…さっきの子に話し掛けてそんなに私走ったかな…でもここまで真っ直ぐ来ただけだし…なんでだろう)
恐る恐る、後ろを振り返って確認をするように見やる。
来た道を振り返っていても誰も来ない――
(戻ってみよ……)
そう思い、ゆっくりとした歩調で、来た道を戻りながら辺りを見

渡し進む。

（確かこの辺りだったかな）
先ほど少女とすれ違った辺りまで来ても、誰もいなかった、勿論その途中でも。
落胆し、肩を落として顔に手をあて考える。
（あれ…そういえば私何処に行くんだっけ？）
顔を上げ何の脈絡も無く、思う。
（あれ…何…してたんだっけ…）
（学校へ行こうとして…家を出て…）
はっと、気がついたかのように手元を見る
（カバンも持たずに…学校…？）
手には何も持っていなかった。
（朝、家を出たとき…持ってたっけ…あれ？　朝…？）
上を見上げる、太陽の日差しはもうそこには無かった。
焦るように辺りを見る。
（あれ？　あれ？　あれ？）
そこには何も無かった、先ほどまであったはずの家も、地面にあったはずのアスファルトの道も、日差しも風も――――
あたかも最初から何も無かったかのように文字通り消えていた。
夢はただ真っ白な、上も下も横も何も感じない場所に立っていた。

（何だろ…思い出せ…思い出せ…）
声に出して呟く。
「学校へ行こうとして―
今日が中学初めての入学式で―
私はしゃいじゃって…赤信号で…車が来て…」
はっと気がつくと夢は横断歩道に居た。信号は赤だ。
そこに1台の車がブレーキ音を立てて夢の立っている場所へ突っ込んできた。夢は呆然と車の方を見て立っていた。

車はそのまま夢の体を通り抜け、車体を大きく揺らしガードレールにぶつけながら停車した。
ふと下を見ると、そこには”自分”が倒れていた。
腕は変な方向にもう一つ関節があるかのように曲がり、糸が切れた操り人形のように倒れている。
徐々にその”自分”から赤い液体がにじみ出てきた。
（ああ…そうだ…私事故にあったんだ…）
周りで人の叫び声が聞こえる。
倒れている自分に人がたくさん寄って来ている。

瞬間――――
再度白い世界が夢の目の前に広がった。しばし立ちすくみ、顔を上げ被うように手を当てる。
「はは…なんだ…また忘れてたんだ…」
あたかもそこに地面や重力がるように、その場にへたりと倒れこむ。
「壁」
そう言い、手を目の前にかざす、パントマイムのように手は白い空間に壁があるかのように滑る。
顔を上げ、座った姿勢のまま、後ろに寄りかかる。
そこには何も無いが、背もたれがあるかのように寄りかかっている。
「…夢の中で夢を見るなんてね…笑っちゃうよね…」
ぼそりと呟き、無気力にただその場にうずくまる。

どの位の時間が過ぎたのだろうか、そもそも時間という感覚があるのだろうか。
それなりの時間は経過したであろう。
「今日は何処行こうかな…今日？　今日って何よ」
一人で自問自答し、くすりと笑う。

可笑しかったのだろう、どのくらいが今なのかすら分からないのに、今日と思える自分が未だにここにあることが。

すくっと立ち上がる。

そのまま夢は白い世界を消え去りそうに歩き出し始める。

そして、その世界に溶け込むように、本当に消えていった。

序　章　　朝比奈　夢（後書き）

頑張って続きコツコツ書きます、読んでいただけると幸いです。

第1章　弐門　歩

彼は今とても眠かった。

昼食――彼にとっては朝食だが、ざわついた教室の窓際の席で、学校に来る時に途中にあるコンビニで買ってきたパンをかじり、窓の外を眺めながら、首を傾げ大きなため息を深く付き、欠伸や嘆息を繰り返していた。

春の陽気が眠気を増長させ、開けた窓から吹き込んでくるそよ風も、何もかもが彼にとって睡魔の呼び声に聞こえた。

「ねえねえ、弐門君また眠そうにしてるよ」

「夜遊びし過ぎなんじゃない？　今日も遅刻してたしさー」

近くで机を合わせて弁当を囲んでいる女子生徒の話し声が聞こえる。

彼、弐門歩（にもんあゆむ）は自分の名前が聞こえたので、それを一瞥して、またすぐに興味ないように視線を窓の方へ戻す。

一瞥した時に、視線が女子生徒たちと合い、視線を戻すと爆笑が起こる、話のネタの笑いものにされているとは気がついたが、歩はそんなことはどうでも良かった。

昨夜は確かだらだらと映画を見ていたが、寝たのは大体１１時過ぎくらいだったはずで、起きたのは昼前の１１時過ぎといったところだ、たっぷり１２時間睡眠、勿論学校は遅刻である。

彼女たちが言うような夜遊びなどはしていない、健康的な生活、むしろ寝すぎと言って良いくらいの睡眠時間は取っていた。

だが彼は眠かった。

パンを一袋空け、力なく机に寄りかかる。

今日が特別眠いわけではない、歩にとってはいつものことだった。

弐門歩はごく普通の公立高校に通う高校生で、今年で３年生になる。

遅刻の常習犯であったが、ギリギリではあったものの辛くも授業

日数が足り進級できた。
進学校と言うわけではないので、勉強にそこまで力が入っているわけではなく、歩自信も授業中殆ど寝てる割には、学力自体はそこまで低いわけでもなくテストは平均点並で赤点も防げており単位も取得できた。
本人から言わせれば、赤点を取り補習や追試を受け、寝る時間が失われることが苦痛であったため、最低限の学力は保つようにしているらしい、勉強の方法は不明　だが――
「やだ、弐門君寝ちゃったよ」
「前同じクラスの子から聞いたけどさー、1年からずっとあーだったらしいよ」
「でも、今年で卒業でしょー、進路大丈夫なのかな？」
「そうだよねー、ってか進路とか言って、あたしもたちもやばいってー」
まだ歩は寝てはいなかったが、ぐったりと机に寄りかかる姿は彼女たちには寝ているように見えたのだろう、それを見て話が色々と盛り上がりだしクスクスと笑っていた。
話があまりに盛り上がりだしているのか、声色も大きくなりだして、クラス全体のざわめきも対比するように増していった。
流石にこうも五月蝿いと、ゆっくりと寝ていられないので、眠い目をこすりながら、だらりと背もたれに寄りかかり伸びをし、教科書の入っていない薄いカバンを持ち、ゆっくりと立ち上がった。
お互いの話が盛り上がりだし、こちらに興味を失っている女子たちを尻目に教室を後にする。

教室を出て廊下をとぼとぼと歩き出す。
彼のクラスは校舎の奥にある為、他クラスの前を通り、他の生徒達とすれ違いながら歩き、渡り廊下を目指した。
渡り廊下を進み、小階段を上がり突き当たりを左へ向くと扉が見えた、そちらの方へと少し歩き目の前に扉が差し掛かったところで

ふと少し上を見上げる。
「図書室」そこにはそう書かれていた。
半開きの扉を開け進むともう一つ扉があり、その扉を開け進んだ。
室内に入ると、涼しい風が歩に吹き込んできた。思わず嬉しくなり、笑みを浮かべる。
この学校の図書室は他生徒の利用が殆ど無く、いつも静かで歩は1年の頃から事あるごとに足を運んでおり、睡眠穴場スポット1位と勝手にランクをつけていた。
（今日は放課後までここで寝るか…）
進級したてということもあり、まだまだ単位や授業日数に対しての危機感が薄いため、今日1日サボることの決意を固めた。
こんなことなら、家でずっと寝ればよかったかなとも思ったが、来てしまったものはしょうがないと思い、すぐに忘れた。
「あ、弐門君こんにちは」
扉を開けたところでぼーっと立っていると、室内すぐ左のほうから声をかけられた。
先ほどの笑みを浮かべたまま、振り返る。
カウンター越しに線の細い小柄な少女が本を抱え一人立っていた。
歩も長身ではなく１７０ほどだがそれよりも頭一つ以上小さな少女だった、黒い髪を腰くらいまで伸ばしており、綺麗に揃った長髪をしていた、毎日手入れをしているのだろう。
容姿は決して綺麗な部類ではないが、どちらかといえば愛らしい表情をした可愛い部類なのだろうが、掛けている赤いメガネが余り似合ってはいなく、少し自信のなさそうな表情が暗めな子な印象を与えていた。
「あー、笹山、おはよう」
カウンターから声を掛けてきた少女、笹山優希（ささやまゆうき）とは顔見知りであった。
1年の頃同じクラスで、1年2年と今もずっと図書委員をしている、図書室によく足を運ぶため、自然と会話をするようになった。

「おはようなんだ、もうお昼だよ？」
そう言いながらにっこりと、多少ぎこちなく見える笑みを浮かべていた。
「起きたの１１時位でさー、寝て起きてそんな経って無いから、おはようかな？」
「うん、おはようかなあ？」
相槌を打つようにした後、首を傾げながら。今度はしっかりとした笑みを浮かべて返事が返ってきた。
「いつも、何をしてるんですか？遅刻ばっかりしてるよね」
敬語が混じりながらそう聞かれる。
最初話してた頃は全て敬語だった、少なくなった方だがまだ少し距離をおかれているのだろう、今でもまだ話の端々によく混ざる。
「んー、寝てる」
欠伸をし伸びながら答える。
「寝てるの？」
優希はちょっとびっくりしたような表情を浮かべる。
「いつも図書室でも教室でも寝てるよね」
「１日１５～６時間は寝てるかな」
少し歩き、カウンターの方により、机に寄りかかりながら答える。
机に寄りかかると、近寄った距離に対してなのか、恥ずかしそうに優希は距離を置いたが、歩は気にせず話しを続ける。
「眠くってさ、笹山もずーっと図書室にいるよね」
「図書委員だし、本好きだから」
少し距離をおき、下を向きながら、抱えていた本を机の上に置きそれに手を置く。
「ふーん、俺が寝るの好きなのと一緒かな？」
「うん、そうかも？」
顔を少し上げまた相槌を打ち、首を傾げながら答える。
「何で疑問系？同じようなもんだって」
「かなあ」

歩にも笑みがこぼれる、それを見て優希もクスクス笑い出した。
「んじゃ、図書委員の仕事邪魔したね。おやすみー」
暫く他愛ない談笑をした後にそう言い、机に寄りかかった手を離し、部屋の奥の方へ行き、室内読書用の長机へと向かう。
「あ、うん、え？今から寝るの？もうそろそろお昼休みも終わりますよ？」
笑みから、ガッカリした顔を浮かべ、びっくりした表情を浮かべた、少し複雑なおかしな表情を見せて、優希は敬語で言った。
「今日はもう寝るよ」
少し立ち止まり、振り返り答える。
「う、うん…じゃあ私もう行くね、あんまりサボらない方が良いですよ」
「だねー、卒業できるようにはするよ。また放課後ー」
持っていた本をカウンターの下に入れ、図書室を出る優希を見送り、本棚で日陰になっている長机の上に薄いカバンを置き、一番手前の椅子に座り込んだ。

誰もいなくなった図書室は、学校の中にいるとは思えないほど静かだった。
稀に教師が来て、叩き起こされることがあるのだが、大抵は誰一人来ることも無い。
外は昼下がりで少し暖かくなっている頃だが、ここは本棚の影が出来て、窓から心地よい風が時々に吹き込んでくる為、弐門には絶好のスポットだった。
（確か次のうちの授業体育だったよなあ）
物思いにふけりながら、机に手を当てその手の上に顎を置く。
（枕と布団が欲しいな、今度保健室で寝に行こうか、でもあそこ落ち着かないんだよなあ）
保健室は保健の教師が度々来る歩に説教をしだしたり追い返した

りするため、あまりいい場所ではなかった。
ベットと枕があるのは利点なので、ちょくちょく誰も居ない時を狙って、こっそり進入して寝ることも多い。
（どんな夢見よう…）
歩は寝る時にはいつもこう思っていた。
こう思うことで、大抵の場合、自分が見たい夢になるからである。
完全に見たい夢を操作出来るという訳ではないが、ある程度見たい夢が見れている気がしていた為、思えばそれが叶うと信じていた。
そして、そんな夢の世界がとても好きだった、夢の中なら何でも出来る気がしていた。
空だって飛べるし、宇宙にだって行ける。
思春期の頃は女の子の夢もよく見ていたし、それに振れると現実のようなやんわりとした感触に浮かれていた時期もあった。
（涼しいし…静かな夢が見たいな…）
徐々に虚ろ虚ろとしながら、想像を膨らませていく。
（ざわつきも何も無い…静かな夢…うん、それがいい……）
静かな昼下がりの図書室で歩は完全に寝入っていった。

第1章　弐門　歩（後書き）

書くペースを余り落とさないようにしっかりと作りたいです。
追記
返信方法等が未だ使い慣れていないので分からず、後書きに書かせていただきます。
先ほど2部分を書き終えて投稿してから、評価等のコメント見させていただきました。
具体的な指摘や評価有難う御座います。次から頭に入れて修正していきますので、これからも宜しくお願いします。

第2章　出会い　1

いつもの事ながら不思議な感覚だ――
自分が自分じゃないような――
今この時なら荘周（そうしゅう）の気持ちだって分かる気がする――
自分が蝶になった夢を見たのか――
蝶が自分になった夢を見ているのか――
まあ、そんなことは今この時にはどうでもいいな――
楽しもう、今が自分にとってのリアルであるように――

気が付くとそこは草原だった。
雲ひとつ無い青空が広がり、初夏の少し暑いくらいの日の光、辺り一面に広がる腰ほどもあるような背の高い草の波が、これでもかと言うほどに、音も無く静かに揺れ動いていた。
「夢みたいだよな、こんな景色…」
そこは紛れも無く夢なのだが、歩は図らずともそう呟いてしまった。
辺りの草に触れてみる、それは草だった――
歩はその触感に心を躍らせた。
「凄いな、結構はっきりしてる…うやむやな時多いからな……」
ここは紛れも無く夢の中だった。
だが今の歩にはその感覚自体は半々あれば良いところだろう。
夢を夢だと自覚して夢を見られるのは、早々あるべき事ではない

のだから。
それは夢に対して真摯に受け止めている人間である、歩にとっても例外ではない。
彼自身もこれだけはっきりと自覚が出来る夢というのは、早々あることではなかった。
だがこれがあるから止められない――
今、歩は草の感触を実感できており、それを草を触ろうと、自分の意志である程度考え行動を行えていた。
「草、草、草…あー静かだなあ…いいなあこれ……」
心躍らされる感覚もある、今ここは紛れも無く彼にとってのリアルとなっている。
訳も無くはしゃぎ、周りの全てを気にせずに、何でもできる。
ここでは彼が全てであり、全てが彼であった。
その感覚に線が一つ切れるように、全てと一体になるかの如く歩は駆け出していた。
「…ははは、これこれ、これだよ、これ」
草を掻き分け、ただひたすらに走る。疲れなど無い、永遠に走っている事だって出来る。ありえない速度で駆け抜けることだって出来る。
歩は高く飛び、背中から草をクッションにするように、大の字に寝そべろうとした。
ドン――
軽い衝撃が背中に走った。
「痛て！……痛い？　そんな訳、無いよなあ…」
普段感じることの出来る感覚――だが夢の中では感じたことの無い感覚を味わい、少し戸惑ったが、すぐに忘れようとした。
「この草はクッションで、ふわっと包み込まれてって……うーん、こういうこともあるよなあ」
頭の後ろに手をやり、大の字に草の上で寝転がり、周りで自分の体重で折れている草をポンポンと叩きながら考える。

「ちょっと上手くは行って無いかなあ…まあ…いいか」
（でもなんかおかしいな、考えれてる…なんでだろ、普段”なんで？”なんて思えること早々無いし…あっても覚める時…覚める時？
自分で夢だって実感できてる…？）
おかしなことだった、夢を夢と自覚できること、あるはずの無い痛みのような感覚、言葉を話している自分を理解し、頭で考えるということを理解できている自分。その全てがおかしく思えた。

「あなた、誰？」
物思いにふけっていると、ふいに頭の上の方向から声を掛けられた。
視線だけそちらの方にやると、自分の寝そべっている頭の少し上から、覗き込むように一人の少女がこちらを見つめていた。
中学生くらいだろうか？　白と紺の標準的なセーラー服に身を包み、きょとんとした顔でこちらを見つめている。
位置が位置だったため、少女のスカートの中が一瞬目に入ってしまい、慌てて目をそらし、起き上がる。
「あ、いや、えーっと……こんにちは」
恥ずかしさで今まで考えていたことも消え、その場から立ち上がり、少しばつの悪い顔で後頭部を手で掻き、間の抜けた挨拶をした。
「こ、こんにちは」
相手も何で慌てていたのかわからないような顔で、返事を返してきた。
「…私、夢っていうのあなたは？」
少しの沈黙をはさみ、少女が言う。
「夢？　夢かあ、ははは――――俺、歩」
（って夢に自己紹介してもしょうがないか）
この夢に対して苦笑を洩らし答える。
「あゆむ？」
尚も疑問を浮かべた表情のまま少女は言った。

「うん、歩くって書いてあゆむ」
「歩…歩…よろしくね」
歩の名前をじっくりとかみしめるように言い、夢はにっこりと微笑み握手を求める手を差し伸べてくる。
その手を握り返し歩も微笑み返す。
（暖かい…まるで生きてるみたいだな…）
夢の手の感触に触れ、じっと見つめながら思った。
「痛、ちょっと痛いよ歩…」
「あ…ごめん」
思わず握る手に力が入ったのか、夢は少しこわばった表情をして、手を離す。
「ううん…いいの…ちょっとびっくりしちゃっただけだから」
夢はきびすを返し、今度は歩の手を引くように、左手を差し出してきた。歩も今度は気をつけながら、その手を優しく握り返す。
「こっち、いい場所あるから付いてきて」
その手を離さないよう夢に手を引かれながら、草の波を掻き分けるようにただ真っ直ぐと奥へ奥へ進んでいく。
（彼女…いや…妹って居たらこんな感じなのかな？）
そうふと思った。
夢の手は小さく、歩からみれば今にも壊れそうにも思えた。
だが夢がぎゅっと握り返すその手は、気持ちのいい体温の暖かさと感触に満ちている。

どのくらい走っただろうか。
一瞬にも感じ、とても長い時間のようにも感じた。
草原を駆けていると、いつの間にか短い芝生のような長さの、緑色の絨毯が広がっているような小高い丘のような場所に出ていた。
「こっち」
夢は少し方向を変え、少し走るペースを上げ、その手に引かれ丘の上の方へと進んでいく、すると公園にあるような屋根付きのベン

チのような物が目の前に見えた。
その場所に徐々に近づくにつれ、丘の先と青空の間がスライドしていくように青白く揺れる。
歩くような速さになり、屋根付きベンチのある辺りまで来た時。
歩はそれが何かはっきりと気が付いた。
「海…」
「うん…綺麗でしょ」
青白く揺れているように見えたのは、日の光を反射した波だった。
ゆらゆらと、まるで大きな蜃気楼のように揺れ動いていた。

第2章　出会い　1（後書き）

やっとルビ1度つけてみた位、機能の使い方がぎこちないです。
コツコツ頑張ります。

第3章　出会い　2

暫くその場に立ち尽くし、キラキラ光る波々を、ただ眺めた。
(凄いな…海かあ…小学生の頃、海水浴に行ったっきりかな。でも…こんなのは始めて見る)
「ねー、歩。こっちに座らない？」
感慨にふけっていると、いつの間に握っていた手を離し移動していたのか、夢が屋根付きベンチにゆったりと腰掛けて手招きをしている。
歩もその手招きに牽かれるように、屋根付きベンチへと足を運び、夢のすぐ横へと腰掛けた。
すると、夢が顔を見上げ、にこにこと嬉しそうな表情をして歩の顔を覗くように眺めてくる。
それに笑顔につられたのか、歩も視線を合わせ軽く微笑み返す。
「…私ね、初めてなんだ」
「何が？」
きょとんとした顔で歩は答える。
「ココで自分以外のこんなにはっきりした人と会うのが」
夢はなおも嬉しそうに、歩の手の上にすっと手を置き言う。
「手、あったかいね」
「君の手だってあったかいって」
歩は置かれた手に少し恥ずかしそうに、それをごまかすように苦笑いを浮かべ言う。
「…そうなの？　そうなんだ…ありがと」
夢は一瞬、虚ろな表情をしたがすぐにそれを振り払うかのように、また先ほどの笑みに戻す。
歩は少し疑問に感じたが、それ以上に今こうしている高揚感からか、疑問はすぐに頭の中から消え別なことを考え出す。

（中学生――くらいかな？　結構活発そうな感じがする子だよな）
少し落ち着いてきたのか、歩は夢をまじまじと観察するように見る。
黒い髪を肩で切りそろえており、歳相応のような声や背丈をしている。今にも走り出そうに落ち着きが無いように足を前後に揺らしている為、快活そうな印象を受けた。
「どうしたの？　歩？」
夢はきょとんとした顔で、歩を見つめ返す。
「な、なんでもないよ」
慌てて視線を海の方へ向ける。
（夢…だよな、これ…）
そう思い、頬を抓ってみる。少し痛みを感じ、すぐ手を離した。
（痛い…夢…じゃないのかな…でも図書室で寝た後、ここに来たんだし…）
「どうしたの？　ほっぺなんてつねって」
きょとんとした表情のまま、更に不思議そうな顔をする。
「うーん…あのさ…これって夢だよね？」
「……うん」
歩がそう聞くと、夢は、はっとした顔をした後に寂しそうに視線を落とす。
「ご、ごめん、なんか変なこと聞いちゃったかな」
夢が急に落胆の表情を浮かべたため、慌てて咄嗟に謝る。
「…ううん、なんでもない」
「でも…」
夢はそう言っているものの、なおも暗い表情のまま、おもむろにすっとベンチから立ち上がる。
「なんでもないって」
くるりと振り向き、少し作った笑顔でそう答える。
「それよりさ、歩のことを聞かせてよ。歩は歳は幾つ？　何が好きで、何が得意とか、何でもいいから聞かせてよ」

「え？　俺のこと？　うーん――そうだなあ…」
元気よく、また歩の横に座り話し出す。
夢の代わる代わるされる質問に、少しほっと安心した表情を浮かべながらも、何を話していいかと困りながら答える。

どれくらいの時間が経ったのだろうか。
尽きることの無い夢の質問に付き合い、もう答えれるようなこともあまり残っては居なかった。
年齢などの質問から、通っている高校の話、子供の頃の話、果てには昨日何を食べたとかの他愛ないことまで答え、いつしか夢の元気な質問は徐々に無くなりだしていった。
心ここにあらずといった様子で答えていた歩は、我に返ると。自分に寄りかかる体重の重みを感じた。
そこには、話し疲れたのか歩に寄りかかり、すやすやと寝息を立てて眠りこけている夢の姿があった。
（寝てるよ…なんか…おかしな夢だよな、これ…）
眠っている夢の肩に手を寄せ、触れ合う感触を確かに感じながらそう思った。
歩がふと周りを見やると、先ほどまでの青い海原や草原が嘘のように、辺りはいつしか夕暮れ色に染まっていた。
青い海は、黄味がかった紅色が薄く伸びるように染められ、丘や草原も徐々に薄暗い影の世界に染まりつつあった。
「…ん…あ、うん…」
横で寝入っていた夢は、少し寝苦しそうに寝返りを打とうとする。ベンチから転げ落ちそうになったので、咄嗟に歩は抱いていた肩を、自分の体の方へと強く引き寄せる。
「――――あ、ごめん…私、寝ちゃってたんだ」
歩に引き寄せられたことで、目が覚めたのか目をこする。歩も寄り添うように肩に当てていた手を外し、少しだけ座っている位置を直すように距離をおいた。

「起こしちゃったね」
体勢を整えて言う。
「何か急に眠くなっちゃって、こんなに話したから疲れちゃったのかも」
しっかりと目を覚まし、夢も体勢を少し直すように歩の方へと寄った。
「…綺麗な景色だよね」
密着に近い状況に少し恥ずかしくなり、歩は海を見ながら言った。
「うん」
「ずっと、これが続けばいいのにね」
本心だろうが、余り深い意味もなく、歩は言う。
その言葉に反応するように、夢は一瞬歩の顔を見るように振り返るが、すぐに沈むように視線を落とした。
海のほうを見つめていた歩は気がついていない。
「…辛いだけだよ…」
ぼそりと呟くように夢は言った。
「え、何？　聞こえなかった」
「何でもないよ」
勿論、歩には聞こえないように言ったつもりだった。夢は顔を上げて作り笑いを浮かべ、適当にごまかすように微笑んだ。
「そう――ならいいけど」
少し気にはなったが、一瞥してすぐ視線を戻した。

（…に……ん…）
聞き覚えがあるような声が、何処からか聞こえた気がした。
「どうしたの？」
きょろきょろと、辺りをうかがっていた歩を不思議に思ったのか、夢が問い掛ける。
「いや――夢は、今何も言ってないよね？」
「うん」

夢は首を傾げ少し小さく聞き取りにくい声で答える。
（にも…くん）
今度は少しはっきりと、頭の中から声が聞こえたような気がした。
（また聞こえた、頭の中から聞こえてる？）
声はなおも聞こえ、徐々にであるが強くはっきりと聞こえてくる。
「…う…したの？」
「え？」
横から夢の声が聞こえたような気がした。
声自体はそれなりな大きさだったのだろうが、フィルターが掛かっているかのように、部分部分がとても聞き取りにくかった。
夢の方を振り向くと、そこはぼんやりと、透明になっているように薄くなっている夢の姿が見えた。
慌てて辺りを見やると、周りのもの全てが、消えていくように霞がかっていた。
ふと、自分の手を見る、自分自身も例外なく消え入りそうに見えた。
（弐門…君…）
更にはっきりと頭の中から声が聞こえる、笹山の声だと思えた。
「…っか…そう…なんだ…」
夢の声が聞こえる。すぐ近くにいるはずなのに、とても遠くから聞こえたような気がした。
「？」
「…あゆ…わたし…こと…す…な…でね――」
「何？　聞こ…ない―」
自分の声すらも少し聞き取りにくくなった。
周りのものはもう、殆どそれが何かすら分からないくらい透き通っていた。
もう何がなんなのかがわからない、考えることすら、一瞬の内に霧散しているようだった。
誰が自分に語りかけているのかも、全てが虚ろになっていく。

「…また……そびに…きて…あそ……てね…」
「に…ん君…起…て、もう…時だよ…」
声が段々と重なり合うように聞こえてきた。１つは徐々に薄れて、もう１つははっきりと。
自分が目をつぶっているかのように、薄れていく。
もう周りには何も見えない。

最後に目を完全に閉じたと思えたとき、誰かがにっこりと微笑み、バイバイと手を振っているような、そんな姿が見えたような気がした。

第3章　出会い　2（後書き）

3章となってますが、2と3合わせて1つの章な感じです。
もし宜しければ、ゆっくりと読んで上げて下さい。

第４章　胎動　１

そこは何かの研究所のようだった。
広い空間に乱雑に配置されたオブジェのような資材や機材の合い間を、みな同じ白衣を来た人間が動き回っていた。十数人ほどいるだろうか、中には今にも倒れそうに虚ろにデスク作業をしている者や、笑みをこぼしながら、数人で専門的な会話を仲交わしている者たちもいた。
各々何らかの作業に取り組んでいる。
「チーフ、被験体ナンバー、Ａ－０１２のＰＧＯ波に、今までにない反応があります」
「データをこちらに転送してくれ、確認する」
その一人が、不規則に並んでいる機材の中で、ひときわ大きなデスクで作業をしている人物へと声をかけた。
チーフと呼ばれた青年――というには少し語弊があるのかもしれない、痩せこけた面構えに、無造作に伸びている無精髭や、全く整えられた形跡がない長髪の御蔭で実年齢が特定しにくい為である。
整った顔立ちをしているように思えるが、だらしない外見でそれも台無しである。
そのチーフと呼ばれた人物は、そう言いながら、デスク上に置いてあった冷めたコーヒーに口をつけながらデータの転送を待った。
「これは…」
「今までにも微弱なのは多々ありましたが、ここまで起伏が激しいのは初めて確認されましたね」
データが送られてきて、彼はそれを確認した。
幾つかの資料書類を運んできた、先ほどデータを送ってきた研究者の言葉が耳に届いていないように、画面を凝視する。
「…まるで、不規則に何かに対して反応しているように見えますね」
資料を手に持ちながら、ＰＣ上に移る画面を見て淡々とした感想

を述べた。
「ああ」
言葉に反応するように、少し画面から座ったまま背筋を伸ばしたが、画面からは目を離す様子はない。
「常時興奮状態に近く、所々浮き沈みしてるな、まるで思春期の子供が異性と話してるときみたいな、そんな風にも見えないか？」
画面から目を離さずに、傍で立っている研究者に語りかける。
「はは、文学的ですね、さしずめ恋でもしてる夢でも見てるんですかね」
「そうだな、この被験者がこうなったのは、確か中学生くらいの頃だろ？」
苦笑しながら言い、冷めたコーヒーを喉に流し込み、背後に立っていた研究者から資料を受け取る。手渡した研究者は、自分のデスクのある方へと戻っていった。
ざっと、手渡された資料と、データの表示されている画面を見やり、もう空になっているコーヒーカップをすすった。
空になっているコーヒーカップを見やり、資料をデスク上に置き、カップを手にして重苦しいように立ち上がる。
腰と肩をコリをほぐすように少し動かし、歩き始める。
ふと、室内の中央の方へと目を向け、そちらの方へと進路を変える。
中央には大きなガラス張りの円柱状の空間があった。
その中の部屋には、様々な機器を取り付けられ、ベットの上で眠いっている、幾人もの男女が居た。
彼は円柱の端をなぞるように移動しながら、一人の女性が正面に見える位置まで移動した。
暫く中で様々な機器を取り付けられながら、すやすやと眠っている女性を眺める。
寝息が今にも聞こえてきそうな、穏やかな表情をしている。
綺麗な女性だった。真っ白な1枚の布切れのような服が体のライ

ンをしっかり見せて、その線の細くも滑らかな肢体がくっきりと窺える。真っ白く病的なまでに綺麗に透き通った肌があたかも人形のように見て取れ、ベットの上を黒く長い髪が白と黒のコントラストを強調させるように広がっていた。

「…眠り姫は、王子様のキスで目を覚ましたいのかな？」

ガラスに手をやり寝ている女性を見ながら言う。

「ちょっと台詞が臭いなこれは」

見たままの印象を口に洩らしたのだが、自分の言った事に苦笑を洩らしながら、背を向けてその場を後にした。

第４章　胎動　１（後書き）

少し短いですが次話投稿です。
これから徐々に話が色々と進展していけたらいいなと思います。
色々な方に読んでいただければ幸いですし、何か感じたことがあれば、是非評価等お願い致します。

第5章　胎動　2

「…弐門君、弐門君」
虚ろ虚ろとしながら、はっきりと耳に聞こえてくる声に反応するように、五感がはっきりとしてくる。指先を何かを探しているかのように、力なくカリカリと長机の上を這わせる感触が伝わり、何処から吹いてくるのか全身に少し寒いくらいに緩やかな風を感じた。
重い頭をゆっくりと持ち上げ、それに呼応するように背筋を伸ばしていく。長机の上を這わせていた指先で、まだ覚めやらぬ目を擦り、瞼を貼り付けるように出来ている薄い目脂を取る。少し頭を抱え、少しぼーっと痛むような感覚に不快感を覚えながら、頭を左右に振る。
「ふー」
一息嘆息を付き、目をゆっくりと開け周りを見やる。
長机を挟んで少し斜め、机の角辺りに一人の女子生徒が立っていた。
歩は目をぱちぱちを瞬きを何度も繰り返し、徐々に戻ってくる視覚と並行するように、我に返っていった。
「……ああ、笹山、おはよう」
少し困ったような表情を浮かべ、机の脇でこちらを見つめている女子生徒の名前を。少しはっきりとした意識で思い出し、それが誰であったかを確認するように、言葉にした。
「うん、おはようなの？　もう下校しないといけない時間だよ」
優希はなおも困った表情を浮かべながらも、相槌を打つようにした後、首を傾げ言う。
歩はその言葉に少しだけ状況を理解したのか、周りを見やる。元々本棚の影に覆われた場所だったが、今は蛍光灯の明かりと、本棚から刺す淡い光だけがぼんやりと薄暗く室内を照らしていた。
すっと、制服のブレザーのポケットに手をやり、中から携帯電話

を取り出し時間を見る。携帯電話に表示されている時刻は、１７時３０分を少し過ぎていた。携帯電話をポケットに収め、肩を軽く回し、腕を上方に大きく伸ばし背筋をピンと張り伸びをする。ある程度リラックスでき意識もはっきりとしだし、椅子にもたれ掛かる。

（…夢だよな）

天井を見上げ、感慨深くため息をつき、うろ覚えの夢を思い出し、心に刻み直すように考えた。

（やけにはっきりした夢だった。最後の方は良く思い出せないけど、でも……）

頭をぽりぽり掻きながら、まだ少し気だるい感触を、今は名残惜しそうに感じ。肩を落とし、椅子により深くもたれ掛かりながら、今見ていたはずの夢を頭の中の思考で再現しようとする。

（……草原を走って）

だが、あの日差しや波打つ草むらは何処にもない。

（……海…綺麗だったな）

青白い、蜃気楼のような海は何処にもない。

（……夢の手、暖かかった）

あの温もりは何処にも感じない。

ふと、名残惜しむように手を開き。閉じては開きを繰り返し、ただ呆然と眺め続けた。

「弐門君？」

その行為を不思議そうに見つめていた優希が言った。

「図書館閉めるので、とりあえず外に出ませんか？」

そんな優希を一瞥だけして、なおも呆けていると。続けざまに、おどおどした少し申し訳なさそうな口調で彼女は言った。

視線を優希に向けると、彼女は目を逸らした。歩は一瞬苦笑し、視線を戻し一呼吸置いて、長机の上に置いてあった薄いカバンを手に取り立ち上がった。

「お待たせ」

「あ…うん、ごめんね」

「いやいや、こっちこそ、ちょっとぼーっとしててさ…行こうか」
カバンを肩にかけ、ゆっくりと他に誰もいない図書室を後にした。
自分たち以外他に誰も居ないような静かな校舎を、２人で言葉を交わすことなく歩いていた。
優希は恥ずかしそうに歩の少し後ろを歩き。歩も校舎の外を眺めたりしながら、物憂げに考え事をしながら進んでいく。
（夢…）
歩の頭の中は、つい先ほどまで見ていた夢の中の出来事で一杯だった。
時折何度も、今はもうないあの温もりをいつまでもいつまでも思い出すように、手を握り見つめた。
下駄箱まで到着し、上履きと靴を履き替える。
「笹山ってＡ組だったんだ」
靴に足を通し、かかとを指で靴の中へと沈めながら、歩は言った。
「うん、弐門君はＥ組でしたよね」
「ああ、道理で普段会うこともないはずだよな」
「でも…結構図書室の方に来てくれるから…」
「まあねえ、週の半分くらいは行ってるかなー？」
他愛ない会話を交わしながら、靴をしっかりと履き、昇降口を後にした。
昇降口を出ると、外は明るめの夕焼けで染まり始めており、部活終わりの生徒の姿がちらほらと見えた。
「ちょっと待ってて」
歩は少し駆け足で、出てすぐ正面に見える自転車置き場に置いてある、自分の自転車へと向かった。
鍵を外して自転車を引きながら、昇降口前で待っている笹山の元へと足早に戻る。
「送ろうか？」
「え？　悪いよ……」

遠慮気味に少しだけ笑みを浮かべながら、優希は言った。
「起こしてもらったしさ、それに2年間お互い顔合わせて話したりしてるけど、こうやって帰りが一緒になったことないしね」
「そうだね…」
「ね、んじゃ行こうか」
「うん」
半ば強引気味に誘い、一緒に横に並びながらゆっくりと自転車を引きながら校門の方へ進んだ。
校門に集まるように、部活帰りの学生たちがわいわいと集団で談笑しながら、自分たちと同じように帰路についていた。
「歩きみたいだけど家近いの？」
「うん、歩いて15分くらいかなあ？」
「へー、俺ん家もそのくらいだろうけど、めんどくさいから自転車通学」
「そうなんだあ」
少し会話を交わして校門を出る。校門を出るとすぐ正面は道路に面していて、左右に道が伸びている
正面の道路では車通りも激しく頻繁に動いていた。
「えーっと、どっち方面？」
歩は片方の手で自転車を支えながら、左右の道を交互に指差して言う。
「こっち、駅の方なの」
そう言いながら、左の方の道を指差し、そちらの道の方へとゆっくりと並んで歩き始める。
「あれ？　駅の方なの？」
「うん、そうだけど？」
「俺もそっちの方なんだ、って、今まで行きでも帰りでも何で会わなかったんだろ」
「だって…弐門君いつも遅刻か早退ばかりでしょ？」
「あー、そうでした」

ばつの悪そうな顔をして苦笑する。その顔を見て、優希はクスクスと小さく笑った。
「家も一緒の方向で、よく顔だって合わせてるのに不思議だね」
「そうだなあ、いつも笹山、図書室で本の整理してるか、本を読んでるとこ位しかあんま、見たことないもんな」
「うん、弐門君も1年の頃だって、教室で寝てるか、図書室で寝てるかばっかりだったよね」
「まあ…ねえ」
「よく進級できてるなあ、って結構思ってたんだよ」
「結構ギリギリなんだよ？」
「やっぱり？」
お互い軽い笑みを浮かべながら談笑を交し、沈む夕日を背にゆっくりと歩いていった。

２０分ほど歩き、幾つか細い路地へと入り、優希の家の前へと到着した。
ゆっくりと歩いていたため、もうすっかり日も暮れ始めて来て、辺りは夕焼け色で染まっていた。
優希の家は住宅街の中にある一軒家で、夕焼けで染まって少し分かりにくいが、真っ白な外装の、新しそうな二階建ての中々大きな家だった。
「送ってくれてありがと」
照れながら俯き、優希はお礼を言った。
「いや、気にしないでいいよ。また学校でね」
「うん……またね、今日は本当に…ありがとう」
優希はちらっと、少しだけ笑みの浮かんだ顔を上げ、すぐに後ろを振り向き、玄関へと駆けていく
軽く手を振りながら、玄関の扉を開け、家の中へと消えていく優希の姿を見送った。
家の中に完全に消えていった優希を確認し、自転車へとまたがり、

歩は自分の家への帰路へとついていった。

第5章　胎動　2（後書き）

小説を書いていて、ふと気が付いたように、前に書いた文章を読むと、手が止まり色々書き直したり、書き換えたくなります。まだまだ若輩ゆえ、手直しの部分など多いですが、飽きずに読んで頂けると、とても嬉しいです。

後、もしよければこの下にある。感想や評価部分に手を出していただけると、尚嬉しく思います。

第6章　流石　菖蒲　1

日差しはそろそろ強くなってくるような、まだ太陽もしっかりと昇りきってはいない昼前だった。

ポツンポツンと、申し訳程度に遊具が並び、外の道路からほぼ敷地の全体が見えるほどの小さな公園の木陰で、一人喧騒の声が響いた。

「あーっ！　もう！　だから言ってるじゃないですか！　え？　ちょっ、編集長――　はー……」

喧騒の主は、薄い灰色のスーツをピシッと着こなした女性だった。まだ２０台半ばといったところだろう、仕事をする女性といった印象が一目に見える。薄い茶色に染まった髪をセミロングほどに伸ばしており、少し顔に掛かった前髪の間から、疎ましげな顔を見え隠れさせながら、携帯電話を握り締めていた。

ツーツーと、相手に一方的に切られた携帯電話を、持っていた腕を肩ごとだらりと落し、落胆の色を浮かべてため息をつきながら通話を切る。

肩からぶら下げているショルダーバックの中に携帯を収め、そのついでにごそごそとバックの中を探るように煙草の箱とライターと携帯灰皿を取り出す。

しゅぼ――箱から取り出した１本の煙草を口に咥え、大きく息を吸うようにしながら火をつける。

「ふー……」

吸い込んだ息と煙草の煙を、深いため息と共にゆっくりと吐き出す。

目に掛かるように垂れ下がっている長い髪を、鬱陶しそうに後ろに掻き上げ、またすぐに煙草を口に咥える。

「編集長なんだってー？」

背後から少し間延びしたような声で話し掛けられる、すっと後ろ

を振り向くと、そこには咥え煙草をしながら、だらしなさそうに立っている男の姿があった。
背は高いが猫背の為、実身長より低く見える。
黒地の上下のスーツでボタンも付けず、羽織っているように身を包んで、しっかりと締まってない曲がったネクタイ、ズボンから全てはみ出しているワイシャツ。そんな如何にもだらしない服装に、それを更に際立たせるように、所々反り残しのある無精髭、短く刈り込んではいるが、どの位まともに洗ってないのか分からないボサボサの頭をしている。
「どうもこうもないですよ、篠原さんからも言ってやって下さいよー」
篠原と呼ばれた男は、頭をぼりぼりとフケを軽く撒きながら掻き、咥え煙草を器用に揺らしながら応える。
「あーん？　どーせ、いつものやつだろ。”文句は言うな、気合入れてネタ探してこい！　ガチャン！　ツーツー…”って――」
「それにしたって、もっと普通な企画でやっていけないんですかねえ……」
目線を逸らし、毒づくように呟く。
「……流石ー、お前まだ、この前の高倉製薬の不正新薬の記事却下されたことでも、気にしてんのかあ？」
「……気にもしますよ、元々採用されてれば大手でばりばり働きたかったんですし、折角掴んだまともなネタなのに……」
「ばりばりって、お前いつの時代の人間だよ。それにうちみたいな三流ゴシップ誌の分ってもの位わきまえろ」
「分って、街中のただの噂の都市伝説調べて、あることないこと書くことがそうなんですか？」
「そう、分かってんじゃねーか」
「はー……」
彼女、流石菖蒲（さすがあやめ）は深いため息とともに、携帯灰皿に煙草をぐりぐりと押し込む。

菖蒲と、もう一人の男――、篠原直也（しのはらなおや）は共にｅａｒと言うタブロイド誌を出す雑誌社でライターや編集の仕事をしていた。
小さな規模の三流ゴシップ誌の為、売れ行きも決して良い訳でなく、社員も編集長兼社長を入れても５人と少なく、仕事自体は人数が少ない為やる事も多く忙しいが、何故潰れないのか不思議なくらいの会社だった。勿論給料も薄給である。
誌面の内容も、芸能人の恋愛記事のゴシップから、ただのピンぼけ写真にしか見えない心霊写真やら、いかにも作り物臭いＵＦＯ目撃写真などと、殆どでっち上げだと思えるような記事ばかりである。中には捏造した物もあるとか無いとか――
今彼女たちはそのタブロイド誌で記事にする為、何処からか得た情報で、最近この街で噂になっている、白昼に現れる幽霊の噂を追っていた。
噂の発端や具体的な内容はまだ分かっていないが、最近女子高生の間などで流行っているらしく、なんでも白昼にぼんやりと幽霊が現れると言ったもので、場所も学校だったり、街中だったりと様々なところで目撃されているらしい。
「だからって、こんな如何にもな都市伝説調べなくっても……」
菖蒲はぶつぶつと呟くように愚痴をこぼす。
パン――
そんな菖蒲に背後から近寄り、篠原はその頭を平手ではたくように叩いた、高めのいい音が鳴ったように思えた。
「痛！　何するんですかー！」
頭を手で押さえながら、振り向き目線を上げ、頭一つ以上も身長差のある直也を見上げながら文句を言う。
「さっさと仕事済ませんぞー」
相変わらずの咥え煙草のまま、やる気のなさそうな声で言う。
「暴力です！　セクハラです！」
なおも文句を言う菖蒲を完全に無視しながら、公園を後にしようと振り向き、とぼとぼと歩き出す。

「ちょっと！　待ってくださいよー」
（……いつか、暴力記事かセクハラ記事を、捏造でもいいから書いてやる）
そんなことを思いながら、公園を後にする直也を菖蒲は足早に追いかけた。

「あの、そこの貴女たち、ちょっとお話いいかな？　あんまり時間は取らせないから、私たちこういうものだけど……」
今日は世間的には日曜で休日である。
街中まで出ると、若者が友人と買い物やら、雑談をしながら歩いていたりする姿が所々に伺えた。
そんな中を適当に女子高生くらいの子に的を絞り、片っ端から地道に声をかける。
無論菖蒲がである、直也はというと大概つまらなそうに菖蒲の脇にぼーっと立っているだけで、たまに口を開き簡単な質問をするだけだった。
これで何人目だろうか、数える気にはなれなかった、大抵は2～3人かそれ以上の集団に声をかける、その方が警戒されてても取材に応じ易い為だ。名刺を見せ取材だと言うと、内輪でわいわい話しながら、統一性無く話しをしてくる。
そんな話しを右から左に聞き流しながら、軽く会話を交した後に、本題を切り出す。
「で、貴女たちは”白昼の幽霊”って見た事あるのかな？」
もう、太陽も真上を越えだし、昼食の時間辺りは過ぎていた。それまでに何人かの女の子たちに声をかけたが、まともな話しは皆無に近いほど聞けなかった。
どれも具体性の無い噂で、如何にも都市伝説の通り、友達の友達が見たとか、そう言う何も確証が得られない情報ばかりだった。菖蒲としては、こんなただの噂に確証があるものとは一切思ってはいないが、やはり全く確証が得られないと少なからず落胆はした。

最初からであるが、諦めたような心持ちでもう何度目かの本題の質問をすると、大体皆同じような答えが返ってくる。
「友達の友達が、見たって言ってたよー」
「あー私も聞いた事あるー、なんかその幽霊、中学生くらいの女の子だってー」
「見たら呪われて死んじゃうらしーよー」
「マジでーうっそー」
代わる代わるきゃいきゃいと、言いたいことを言う少女たちに内心穏やかではなく、表面では作り笑いを浮かべながら、ついつい力の入る手で一応手帳にメモを取る。
（言いたいこと言いやがって、もっと協調性っつーもん意識して言えっつーの、こっちだって好きでやってんじゃないのに）
心の中で毒つきながらも、にこにこと作り笑いは絶やさない。
「貴重なお話ありがとね、じゃ」
これ以上の情報は得れないと思い、話しを切り上げようとする。
「はいはーい、またねえー」
なおも内輪で談笑をしながら、こちらの話など聞こえているのか聞こえていないのか分からない様子で、女の子の1人から生返事が帰ってくる。他の子たちも気が付いたのか別れの挨拶をお互いの声を被せながら適当に言ってくる。菖蒲は最後にお辞儀だけして、足早にそこから離れる。
後ろからはとぼとぼと直也が変わらない歩調でついてくる。
先ほどの女の子たちと分かれ後ろを振り向いた時点で、菖蒲は作り笑いを解いた。少し歩き、もう少女たちの姿が見えなくなったあたりで、軽く地団太を踏む。
「……ストレスでも溜まってんのか？　皺だらけになるぞー」
地団太を踏む姿を見て、後ろから直也が追いつき横に並びながら、全く気遣い無く言う。いや、もしかしたら分かって言っているのかもしれない。
「あーっ！　もう！　篠原さんももっと、ちゃんと取材してくださ

いよ！」
「…腹減ったなあー」
直也は咥え煙草をぷかーっと吹かしながら、遠い目をする。
「大体、友達の友達が見たーとか、適当な都市伝説そのままのネタしか上がってないんですよ、このままじゃまともな記事になんないですって！」
完全にこちらを無視している直也に、イライラするのを理性で押さえながら、強い口調で言う。
「おいおい、俺にあたるなよ。それにちったーネタ増えただろー」
「何がですか！」
「……幽霊は中学生の女の子らしい」
「はー……」
毒気を少し抜かれ、どっと疲れたように肩を落とす。
「…それより腹減ったなー、飯にしねーか？」
「…いいですけど、お金あるんですか？」
目じりだけを横目に上げ、とぼとぼと歩きながら、答えがなんとなくわかっている質問をぶつける。
「無い、貸してくれ」
毎度毎度のことだが、最初の頃から一切悪びれた様子も無く答えの決まった答えを出す。
「……ちゃんとメモ取ってるんで、次の給料の時遠慮なく持っていきますよ」
こちらの話を聞いているのか聞いていないのか分からない。お互い違う意味で遠い目をしながらとぼとぼと歩き、何処か近くに飲食店がないかと歩いた。

第6章　流石　菖蒲　1（後書き）

はい、こんにちは、作者です。
読んで頂いて有難う御座います。
これからもコツコツ書きますので、どーぞまた読んでくださいね。

作者は、この後書きの下にある評価部分に手をつけてもらえると喜びます。

第7章　流石　菖蒲　2

「牛丼、大盛りネギ濁で」
「俺は牛丼の並ね」
二～三分ほど歩き、牛丼屋を見つけたので、そこで遅い昼食を取ることにした。
もうそろそろ午後3時になろうといった時間で、店内は昼食時間を過ぎている為か、客入りは少なく静かなものだ。
入ってすぐのカウンター席に並んで座り、店員に注文をする。
菖蒲はバックから手帳を取り出し、直也の借金欄のところに、四月二十九日　三百五十円と書き加えた。
「…おい、細かいな」
「当たり前です、ってか勝手に人の手帳覗かないで下さい」
こちらの手帳の中を覗き込んでいた、横の席に座っている直也は手帳を見ながら言う。
確かに直也の言う通り、細かい金額がずらりと並んでいた、煙草の代金、飲食代、直也と行動して、彼が菖蒲に借りて私的に使ったものの全ての金額が1円単位で記してあった。
細かい金額が多いが、月で換算すると数万円くらいにはなることもざらなので、ただでさえ薄給なので馬鹿に出来る金額ではない。
菖蒲はちらりと、直也を一瞥し手帳を隠すように避けた後、閉じてバックの中にしまう。
「固いこと言うなよー」
手帳を隠され、ばつが悪いのか視線を泳がせるように店内をぐるぐると見渡しだす。
「はい、こちら並になりますね、こちら…大盛りネギ濁になります」
少し待っているとトーンの低い声の店員が、淡々とした接客態度で牛丼を運んできて菖蒲たちの前に置き、厨房の方へと下がる。

ピーク時間を過ぎている為か、かなり早く作られてきた。
「はい、どーぞ」
それを受け取り、割り箸を二つ取り出し一つを直也に手渡す。
「サンキュー」
そう言い割り箸を受け取り、二つに割り食べだす、菖蒲はというと少し多めに、紅しょうがを乗せていた。そんなこんなをしながらも、各々牛丼を食べ進みだした。
「……この後、どうします？」
食べながら、視線は向けずに、隣の直也に対して言う。
「…んー、大体まとめると、今んとこどんな感じ？」
少し考えた様子で、応える。
「ちゃんとメモくらい取ってくださいよ」
「俺は頭の中で覚える主義なんだ」
「…覚えてないくせに」
ぽつりと、小声で聞こえるように毒付きながら、先ほど閉まった手帳を再度取り出し、今日の取材をまとめた欄を探す。
片手で器用にパラパラとページをめくりながら、先ほどまでの取材した内容のページを探す。
「えーっと、あった」
もう片方の手で、割り箸を持ち牛丼に手をつけながら、答える。
「…一番多かった情報は、幽霊は小～中学生くらいの女の子の姿をしている」
「……他には？」
直也は黙々と食べながらそう言い、割り箸を振り次の情報を要求する。
「その女の子は、短い髪にセーラー服を着てる姿で目撃されているのが大多数ですね。ほんとに目撃されてるのかは知らないですけど」
本音を洩らしながら、嘘か本当か分からない情報を読む。
（っていうか作り話に決まってるだろうけどね）
内容はある程度の具体性はありながらも、どうでもいい尾ひれは、

聞くたびに付け加えられているようだった。多分その場で考えられた物もあるだろう、目的としては詳細を調べたいだけなので、そう言った後から幾らでも付け加えられるような情報は、全て聞き流してはいた。
「で？」
「他にはー、昼でも夜でも関係なく目撃されてるようです、名前のまま”白昼の幽霊”って訳ではないみたいです、ただ――」
「ただ？」
「学校内で目撃されたって噂が多いみたいですね、だから昼間学校にいる学生から”白昼の幽霊”って名前が流行ったんじゃないかと思います」
都市伝説などは一種の流行みたいな物だと、菖蒲は考えていた。
だが、実際には大抵の噂がそうであろう、実際に見たとされるのは、友達の友達であり、顔も合わせたことの無いような第三者なのだから。
勿論菖蒲は、今回の”白昼の幽霊”もその一種だと、考えた。
誰かが言い出して、それが伝言ゲームのように一部に伝わるうちに、ある程度の具体性を帯びた情報になり、名前などが想像され形が作られて生まれただけの、偶像に過ぎないと。
「…ふーん」
「……ってちゃんと聞いてます？」
本当に聞いているのかどうか、怪訝な顔をしながら隣を向くと、一足先に食べ終わったのか、直也は爪楊枝を取り出し咥えていた。
店内禁煙の為、今まで咥えてた煙草は、入店するときに店の入り口前の灰皿で消しており、口寂しいのだろう、煙草代わりに爪楊枝をゆらゆらと揺らせながら咥えている。
「聞いてるよ」
菖蒲の方を一瞥して答える。
「はー……」
深くため息をつく、多分聞いてるというからには聞いているのだ

ろうが、このただの都市伝説を何で調べ歩かなければならないんだろう、と言う気持ちもあり。どうにも煮え切らない気持ちは、すぐため息に変わる。
「で、他には？」
「あ、はい、えーっと」
集中を一応仕事のことに戻し、視線を手帳に戻し再度確認する。
「で、目撃してもすぐ消えてしまうと、それで幽霊と言われてるようですね。まあ実際見てみないと何とも言えないですけど」
（ま、居る訳無いけどね）
直也にも心の中でも、皮肉をこめながら呟く。
菖蒲は昔から基本的に幽霊やＵＦＯとかを信じたことは無い、居るかもしれないとは思うが、それはあくまで出来るだけ現実的観点からの推測である。
幽霊などは、心理的不安からの幻想で、当事者からは本当に居るように見えるわけだろうから、見えてる人間には現実なのだろうし、ＵＦＯ自体は作り物の捏造ばかりだろうが、地球という星に自分たちのような生物がいるわけだから、宇宙に他に知的生命体がいてもおかしなことでは無い、そんな程度のことだった。
だが、あまりにＳＦチックやオカルト的なことは、フィクションとしての知識や情報的には得るのは問題ないが、それを盲信的に信じる気には全くなれなかった。それが具体性も無く一人歩きしているような物なら尚更である。
「ふーん」
菖蒲にはつまらなそうに聞いているように、そう思えるように一言直也は言った。
少し気にはしたが、いつものことだろうと続けて淡々と情報を整理するように言う。
「後はー目撃されているのは、中学、高校中心らしいです。この近辺限定的な噂のようで、市外の学生とかはその噂を知らないようです……大体こんなとこですね」

「そうかー、じゃー行ってみるか」
「行くって何処行くんですか？」
吃驚したようにきょとんとした顔で、隣を振り向き直也を見やる。
「決まってんだろ、学校だよ」
「え、今から行くんですか？」
「当たり前だろ、百聞は一見にしかずって言うだろ、近くのとこ行って適当な理由つけて、校内見させてもらえばいいだろ、それに――」
「それに？」
「運が良ければ見れるかもしれねーじゃん、その幽霊が」
にやにやと、笑いながらふざけた様子で言う。
「まあ……見れる見れないは別にしても、現地行って情報集めた方が良さそうなのは確かですけどね、部活とかで休日でも学校にいる生徒はいるでしょうし」
からかっているのか、ふざけて言っているのかは分からないが、そんな事あるわけないだろうと言わんばかりに、ため息をつくように肩を落とし、現実的な答えを返す。
「夢がねーなー……」
「そんな夢なら無くていいです」
きっぱりと言い放つ。
「そんな訳だから、さっさと食え、それ食い終わったら行くぞ」
「あんまり急かさないで下さいよ」
直也は席をゆっくりと立ち、菖蒲は急ぎながら半分ほどの残りを掻き込むように胃の中に収め、早々にこの場を後にした。

「で、何処が一番近いんだ」
店を後にして、早々に煙草に火をつけながら直也は何処に向かうかの話を切り出した。
「確か、駅前から南に15分くらい歩いた所に、県立高校がありますね」

思い出すように、近くの学校の位置を考えて答える。
「じゃ、そっから行ってみるか」
直也は煙草を美味しそうにふかしながら、とぼとぼと歩き出した。
菖蒲もすぐに直也の横に並び、まず駅前へと足を進ませていった――

第7章　流石　菖蒲　2（後書き）

この下の評価の部分を書き込んでくださると、作者は喜びます。
もし宜しければ清きご一票を、読者様のご意見ご感想が作品を作る意欲に変わっていきます。

第8章　予兆　1

第8章　予兆　1

彼女たち――、流石菖蒲と篠原直也は駅から徒歩十五分ほど歩いた所にある、とある県立高校の正門前にいた。

「七海南高等学校か」

直也はぼんやりとした口調で正門の横にある学校名を呟いた。

それに釣られ菖蒲もそこに視線を当てる。

男女共学で、全校生徒の人数は約六百人ほど、普通科、夜間定時、通信がある。

スポーツで有名とか、進学校で学力レベルが高いと言うわけではなく、これといってあまり特徴の無い、そんな高校だった。

今日は日曜日の為、敷地内を校門の辺りから見ると、通信制の生徒らしき私服の人間がちらほらと伺える。

「なんか、舌噛みそうな名前」

視線を戻し、ぼそっと思ったままの感想を呟く。少し苦笑しながら、自分の言った事が少しツボにはまったのか、もう一度心の中で繰り返す。

意識はしてないが、菖蒲はそういった癖があり、時々トリップしたようにクスクスと一人で笑い出したりすることがあった。

自分では面白いことだと思っているのだが、旧友などには笑いのセンスは無いと、はっきりと言われたことはあり、正直心外だと思ったことはある。

「……行くぞー」

直也は煙草を地面に捨て、靴のかかとでぐりぐりと火を消して言う、菖蒲も我に返るように気がつき、直也と共に高校の敷地内へと入っていった。

敷地内へ入ると、正面に駐車場が広がっている。
近くで見ると所々塗装の剥がれたりひび割れのある、少し古ぼけた校舎が目に入った。左側――校舎側の道へと歩いていくと、校舎の渡り廊下越しにグラウンドが見えた。
きょろきょろと視線だけを辺りを窺うように運び、値踏みするように観察する。校舎側の方向に、昇降口らしきものが見える。その近くに設置されてるベンチに、五～六人の通信制の生徒らしき私服の若者がたむろしていた。
ぱっと見、高校生の年齢には見えそうにないものも何人かいて、近くにステンレスバケツを置き、灰皿代わりに囲んで煙草を吹かしている者も居た。
何を話しているのかは分からないが、笑いを浮かべながら楽しそうに談笑している。
「……私服のやつが多いな、年齢もお前くらいなのも何人か居るみたいだし、そのまま校内に行ってみるか」
「この学校、通信制があるみたいですね、多分通信の生徒ですよ、聞き込み先にやりません？」
人が居る位置から少し離れた場所――自転車置き場の影で、小声で行動の打ち合わせをする。
傍から見たら怪しい光景にも見えるだろうが、あえてこちらを興味深く見つめる人間も居ないだろう。
「聞き込みなら後でも出来るさ、時間も時間だから人が多く校内に残ってる間に、少し中を回りたい」
菖蒲の意見を、さも興味なさげに強気に却下する。
「……分かりました。ただ、呼び止められたりしたら、言い訳お願いしますよ。口裏は合わせるんで」
分かったのか分かってないのか、もうこちらに視線すら向けずに歩き始めた。
直也はマイペースというか、やりたい事やりたくない事を強引に決める節があった。

今までもそれに何度も付きあわされている。最初は反発もしたが、全く意見を変える気が無いのは今までの経験上分かっていた。
菖蒲は諦め、軽いため息をつくようにしぶしぶ引き下がる。
もしかしたら”白昼の幽霊”を見れるんじゃないかとでも思っているのだろう。そんな訳無いだろうと思いながらも、いつものことだと、素直に従った。
大抵の場合何も無く残念がることが多いのだが、稀に目的が沿うこともあり、そういう時子供のように目を輝かせる。直也のそういう所だけは嫌いでは無かった為、あえて反論することも少なくなった。

昇降口の辺りで雑談をしている集団を尻目に、校舎の中へと入っていく。
下駄箱がすぐ目の前にあり、下駄箱の上には大量の荷物が置いてあった。教科書やジャージが見える。
（普通科の生徒の物かな？）
普通科の生徒の下駄箱だろうと推測した。丸見えの下駄箱には靴は無く、変わりに同じ形の上履きだけがずらりと並んでるのが目に取れた。
直也は無造作に下駄箱の上履きに手を伸ばし、取り出しては仕舞うを繰り返しだした。
一つの名前の書いていない上履きを手に取った時、靴を脱ぎ下駄箱の上にやり、その上履きを履いた。
「……何やってるんですか？」
「スリッパも無いし、靴下でうろうろするのもなんだからな」
その姿を見つめていると、直也はそう言った。確かに普通科の生徒は校内には多分居ないだろうと思った。こくりと頷き了解の合図を送り、習うように女子生徒の、名前の無くサイズの合いそうな上履きを探して、それに履き替えた。
「どっちへ行きます？」

「まずは教室のある方へ行こうか」
下駄箱の奥はすぐ左右の通路になっている。窓があり、窓越しに中庭が見えた。
どうやら二つの校舎の中間に下駄箱がある作りのようだ、中庭の見える窓から左右の校舎を外から見比べる。
「こっちですね」
右側の校舎に職員室らしきものが見えたので、そちらとは逆の校舎を指差す。直也は反応こそ示さなかったが、こちらを一瞥だけして左の通路へと進んだ。
校舎内は外から見た印象とさして変わらず、古ぼけた印象の校舎だった。
木製というほど古い校舎では無いが、それでもかなり長い間補修などもされてはいないのだろう、外から見える以上にひび割れが目立った。
（夜中なら少しは如何にもって感じではありそうだけどね）
今はまだ日も当たる時間だが、夜中になれば少しは恐怖スポットといった感じはするなと思えた。
仕事で夜の廃ビルだとか、幽霊トンネルなどに行くことは多かった。
今でも使われている学校に対して少し失礼ではあったが、そういう考えが先に浮かんでしまった。
最初はそういった場所に行くのは嫌だった。
仕事とはいえ、余りに下らないとさえ思っていた。
実際本当の心霊体験は何一つ体験したことが無かった為、やって行くうちに慣れと仕事の対象としての価値観が先行するようになった。
少し歩き、教室の並んでいる廊下を進んでいく。手前にあった教室を覗くと、通信制の生徒らしき者たちが教室内で談笑を交していた。左手につけた腕時計をちらりと見る、時間は午後三時半をまわった所だった。

もう教室内での学習時間は終わったのだろう、残って友人達と会話をする者だけが残っている状況だった。
確かに直也が言ったように、怪しまれずに徘徊するなら今がチャンスなのかもしれない。だが後ろめたい事をするわけでは無いので、直接適当な理由で取材を受ければ良いのだろうとは考えた。
今更悔やんでも遅いことだし、今のように直也と一緒の仕事をしていると、どうにも彼のペースに合わされてしまう。

特にさしたる会話も無く淡々と、校舎内を回り続けた。
二階には誰一人として人はおらず、三階も同じだった、通信制の生徒の使う教室は一階だけなのだろうと推測した。
渡り廊下を進み反対側の校舎へと移動する。
「何も無かったですね」
右側の校舎の方へ入った時、そう直也に呟いた。
直也から返答は返ってこなかった。
変わりにちらりとこちらを一瞥し、多少不機嫌そうな顔で顎でくいっと、先へ行くぞと言うように歩きながら合図をする。
どうやら何も無いのがお気に召さない様子だ。
(勝手なんだから、でも…)
心の中で毒づくも、何も自分で決めない優柔不断な男よりは、遥かにマシだろうとは考えた。
だからといって、ここまでマイペースに事を進められるのも不快といえば不快だが――
こちらの校舎の三階は理科の実験室や、社会科資料室などがあるようだ、開けようと軽く手を掛けてみたが全て鍵が掛かっていた。
今いる場所は人がいるはずの校舎内にも関わらず、誰も居ないかの如く静まり返り、窓から日の光も直接差してこない為少し薄暗く、幽霊が出てもおかしくは無さそうな雰囲気はかもし出していた。
学校内には幾つも、このように人の集まらない空間は存在しているのだろう。

多分噂はこういう場所を通った人間が、幽霊を見たのだと言えば、あながち信じられて広がって行くといったことがあっても不思議では無いと、そう思えた。

第8章　予兆　1（後書き）

毎度毎度のことですが、読んでくださっている方、本当にどうも有り難う御座います。
下の感想評価部分に手を出すと作者は喜びます。清きご一票良ければお願い致します。

第9章　予兆　2

ふと、視界の隅に何かを捕らえたような気がした。
反射的に、辺りを窺う――しかし、至って先ほどと変わった様子は何処にも無い。
（気のせいかな……）
ほっと胸を撫で下ろす。もしかしたら何か居たのかもしれないと思うと、少し残念な気もした。
気のせいだろう、雰囲気に飲まれて、何か居たように感じただけだ。そう自分に言い聞かせた。
ドン――
不意に何かにぶつかった。
吃驚して一瞬何が起こったのか分からなかったが、すぐにそれが直也の背中だと分かった。
「もー、急に止まらないで下さいよ」
少し俯いていたので、額辺りがぶつかったのだろう。じんじんとする。
手で額を押さえ、さも痛そうな素振りをして直也を見やる。直也はきょろきょろと、何かを探すように辺りを窺っていた。
「どうしたんですか？」
挙動不審な直也を怪訝そうに見つめる。先ほどの菖蒲も傍から見ればこう見えたのだろう。
「いや……何か居たような気がしたんだけど……気のせいか」
「篠原さんも？　ですか」
自分と同じことを感じていることに驚いた。
まさかと思いながら再度辺りを窺うが、先ほどと同じで何か居る様子は無い。
「も？　お前もなんか見たのか？」
不思議そうに首を傾げていた直也は、菖蒲の台詞に怪訝そうな顔

をして応えた。
「いえ……見たってほどじゃないです。視界の隅にチラッと何かあったような……気のせいだと思いますけど」
はっきりと何かを捕らえたわけでもない為、酷く曖昧に答えた。
「お前も見たのか、これは本当に何か居るかもしれないな」
こちらを向き直也は言った。
冗談で煽るように言う訳ではなく、真剣な面持ちをしていた。
居て欲しいと信じているだけなのかもしれないが、はた迷惑なことである。
だが、同じようなものを感じたのは確かなのだろう、そう思うと少し敏感になった。
「居るわけ無いじゃないですか」
急に真剣な顔をする直也に、少し引きつった笑いを浮かべながら応える。呆れたのが半分と不安が半分な笑みだった。
冗談だと思いながらも、直也の表情と、先ほどの話しのせいで不安を煽られた。心持ちが変わった事が原因だろう、周りの空気が少し変わったと感じた。
（気のせい気のせい）
これ以上不安を煽られないように、冷静になるよう心掛けた。
小さくため息のような深呼吸を繰り返し、気持ちを落ち着ける。
なんのことは無い、気のせいだと、自分に言い聞かせた。
「あれ？」
俯き冷静を保っていると、間の抜けた声が聞こえた。
直也が言ったのだろう、顔を上げこちらのほうを向いていた直也の顔を覗き込む。
菖蒲の背後の方を糸が切れたように、ただ見つめていた。
「どうしたんですか？」
後ろを振り向く気にはなれず、直也に問い掛けるが、応えは返ってこない。
（まさか……ね）

そう思いながらも、どうしても振り向く気にはなれない。直也はぽかんとしながらも、焦点だけしっかりと定まった状態のまま、菖蒲の背後の方へと歩き出した。
「おい、こっち見てみろよ」
その場に固まっていると、背後から直也の声が聞こえた。
出来るだけ冷静を装いながら、背後を振り返る。

そこには何も変わらない風景が広がっていたように思えた。大きなため息をつき、冷静さを取り戻し、安心しながら直也に寄っていった。
「篠原さーん、からかわないで下さいよー」
こういった事で冗談を言うような人では無いはずだが、からかわれたのだろうと思った。
少しあった不安のせいもあり、徐々にからかわれたことに対して怒りの感情も湧いてきた。
なおも返事無く、ただ一点へと向かう直也の背を見ながら、文句を言おうとその横へと並ぼうとした。
軸をずらすように横へ半歩反れる。すると、今まで直也の背で死角になって、見えなかったものが視界に入った。
「え？」
横に並ぼうとしたまま、思わず間の抜けた声を上げる。
「……白昼の幽霊……？」
そこには廊下の上で寝そべっているような、セーラー服の少女の姿があった。
眠気を覚ますときのように、手で目をごしごしと擦って、再度その場を見つめる。目の錯覚では無さそうだ、そこには紛れも無く少女が一人横たわっていた。
「うっそだー……」
信じられないといった様子で呟くが、視界にその異様な光景がはっきりと見て取れる。

横たわっているだけだったら、生きている人間が何かあったのだろうとでも、思ったのかもしれない。
だがその少女の姿は異質だった。
廊下に溶け込むように、まるで輪郭だけがそこにあるかのように横たわっていた。
歩みを進めて近寄っても、その姿は変わらない。人間の形をしたカメレオンでもいたら、まさにこんな感じだろう。
やけに冷静になった頭でそんなことを考える。
ほぼ少女の目の前辺りまで来た所で、直也も菖蒲も立ち止まる。
「これ何だと思います？」
白昼の幽霊だと思われる少女を指差しながら、直也に問い掛ける。
「幽霊だろ」
何当たり前の事を聞いてるんだと言わんばかりに答える。
（こういう人だった……）
首を傾げ落胆の表情を浮かべ、菖蒲自身も何か線が切れたように開き直った。
実際こういう光景を目の当たりにすると、今までの幽霊という価値観がガラガラと音を立てて崩れていくようだった。
菖蒲は怪訝そうに、少女をまじまじと観察する。
すやすやと寝息を立てるように廊下で寝ているように見えた。ゆっくりとした息使いが感じられるように、胸の辺りが呼吸をしているかの如くゆっくりと揺れている。
ぼんやりと曖昧ではなく、はっきりと目に取れるが、線画のように所々透けていた。
「寝てますね……」
「そうだな……そうだ、流石ー写真撮っといてくれ」
直也に言われ慌てて気がついたように、ショルダーバックの中からデジタルカメラを取り出し、シャッターを切る。
直也はというと、少女に触れようと試みている。しかしスカスカと感触も無く手は空を切っていた。

「おもしれー」
なおもはしゃぐように、手をぶんぶんと少女の体の至るところを掻き回していた。
何だか少し卑猥に見えた。
馬鹿みたいにはしゃいでいる直也を尻目に、デジカメで撮った写真を確認する。
「あれ？」
そこには何も移っていなかった。幾つか撮った写真全てが、直也の体や廊下だけが写っているだけで、他には何も写っていなかった。
（普通幽霊とかは写真に写るもんでしょ）
そんなことを思いながら、写らないことに首を傾げた。
「ちょっと！　何やってるんですかー！」
もう一度肉眼で確認しようとすると、そこには少女のスカートの中を覗き込もうとしている直也の姿があった。
慌てて止めると、何で止められたのか分からない表情をしながら、ばつの悪そうに立ち上がる。
「幽霊だから触れねーし、幽霊ってどんなパンツ履いてるのかなとか……男の浪漫だろ」
「いや……男というか、人として寝てる女の子のパンツ覗くとか、倫理的にどうかと思うんですけど……」
ぼやきながら、軽蔑の眼差しを向けると、直也は開き直った表情で少女を指差す。
「これ幽霊、人の倫理観で推し量っちゃダメ」
（ダメだこの人はダメ人間だ）
確かに幽霊だが――とは思ったが、そういう問題では無い。
幽霊とはいえ女の子のスカートの中を覗き見るのは犯罪なのだろうか、そういった意味合いでは別に犯罪という訳では無いだろう。
だが女としてその行為を見逃すわけには行かなかった。
「写真の方はどうだー？」
つまらなそうに渋々覗きをするのは諦めた直也は、写真のことを

切り出した。
軽蔑の表情を、呆れて諦めた表情に変えて、デジカメを手渡す。
「写ってないな」
直也は手渡されたデジカメのデータを見ながら、不思議そうに交互にデジカメと少女を見比べ続ける。
菖蒲は白昼の幽霊の少女の、安らかな寝顔を見やる。
不思議な感じだった。
恐怖の対象の幽霊のイメージとは全然違う、まるで生きてるようにすら見える。
（あれ……）
ふと――何か、違和感のような物を感じた。
懐かしいような、昔何処かで会ったことがあるような、そんな感じがした。
寝息を立てる幽霊の少女の姿を見つめながら、思い出そうとするが、どうにも思い出せない。
（気のせいかな）
少女の肌に触れる様に手を置く、しかしその手は直也と同じように空を切る。
仕方が無いので、空中で止めるように幽霊の少女の上に手を置いた。
どんな夢を見ているのだろうか、その安らかな寝顔が愛しく思えた。

第9章　予兆　2（後書き）

読んで頂いて有難う御座います。徐々に今まで書いた部分も修正しながら、次を書いてます。
もし気が向きましたら、この下にある評価感想部分に手を出していただけると嬉しいです。

第１０章　予兆　３

「あの……何やってるんですか？」
突然背後から聞こえた声に、びくっと体を震わせて反応した。振り向くとそこには制服姿の女子高生の姿があった。本を大事そうに両手で抱えている。黒髪が髪が腰ほどまであり、赤い眼鏡を掛けた背の低い少女だ。
きょとんとした表情をしながら、こちらを見つめている。
急なことで驚き、慌てながら必死に言い訳を思い浮かべる。
「弟がこの学校に転入したいようなので、資料と写真を……って、優希ちゃん…？」
反射で言ったが、我ながら如何にも怪しい言い訳をしたと思った。しかしそんなことは一瞬で頭の中から薄れていった。
それ以上に目の前の少女、笹山優希とこんなところで出会うなどとは思ってもいなかった。
「……菖蒲さん？　お久しぶりです。こんなところで何やってるんですか？　それに弟さんなんていましたっけ？」
手を顔に当て、ばつの悪そうな顔をしながら、どうしたものかと頭を悩ませた。
「……なんだ流石、知り合いか？　紹介しろよ」
場の空気を全く気にせず、デジカメを片手にこちらに向き直っている直也が言った。
「……えーっと…何から説明したもんか……実はね……」
ほっとしたのか、直也の言葉に毒気を抜かれたのかは分からないが、冷静さを取り戻した。
意識してかは分からないが、いつも直也の台詞には安心ではないが心を落ち着けられる時がある。菖蒲自身もすぐ気が動転したり、神経が張る事が多いため、直也の性格は助けになることが多かった。

直也に優希を紹介した後に、優希に事情を説明した。
仕事でこの高校に、ある目的で取材をする為に潜入して、ウロウロと徘徊していた。そう端的に優希に言った。
「そうだったんですか」
「そうなの、でね、私たちのことは黙ってて貰えないかな？」
納得したかしてないかは分からないが、多分理解してくれただろう。昔から勉強が出来るわけでは無いが、物分りの良い子だとは記憶にあった。
優希とは家も近く町内も一緒で、彼女の姉が菖蒲と同級生だった為、昔から遊びに行くたびに妹のように可愛がっていた覚えがある。
今でも近所で見かけるたびに、軽い談笑くらいはする。
だが、まさか優希がこの高校に通っているなどとは考えも及ばなかった。しかも休日にこんな場所で出会うなどとは尚更である。
「分かりました…けど、見てて如何にも怪しい、って様子でしたよ」
「そうねー……気をつけるわ…」
ほっと、一安心して気が抜けた。幽霊の少女を発見してからというもの、意識がそちらの方に行って気が張っていた。その気持ちの糸が切れて、少し和らいだ気がした。
「おい流石……こっち見てみろよ」
小声で耳打ちをするように直也が顔を寄せて話し掛けてきた。
直也に言われ後ろを振り返ると、そこには何も無かった。先ほどまでそこに居たはずの、白昼の幽霊の姿がもうそこにはなかった。
少し慌てるように廊下や周囲を窺うが、そこには当たり前の光景が広がっているだけだった。
「あれ？　さっきまでここに……」
「どうしたんですか？」
優希が背後からきょとんとした顔を覗かせて言った。
優希には白昼の幽霊のことはまだ話していない、ただ仕事で取材とだけ言ってある。
しかし、背後の少女の姿に、すぐに問い詰められるかと思ったが、

その少女の姿はいつの間にか忽然と消え失せていた。
「いえ、何でもないわ」
出来るだけ平静に言葉を返す。何にしても、話がややこしい方向へ進まないで何よりだった。そう思うと少しほっとした気持ちにはなった。
（でも……あの幽霊の子、どっかで見たことある気がしたのよねー……）
だがどうにも思い出せない、昔会ったことあるような、そんな気がするだけだった。
すぐに思い出せないことなら、そこまで重要なことでは無いだろう。そう思い深く考えてもしょうがないし、目先のことだけに集中しようとした。
「……じゃ、私これで帰りますね」
顔を覗かせている優希がそう言い、重そうに抱えている本を持ち直した。手を振り別れを告げると、ぺこりと軽くお辞儀をして、彼女はこの場を後にした。
「何だったんでしょうね」
「……ああ、写真にも写らないし、今はもう消えてるし、一体なんだったんだろうな」
視界から優希の姿が消えると、直也の方に向き直り、ぼそりと洩らす。少しガッカリした表情で、デジカメを疎ましそうに見つめながら直也は応えた。
「でも、本当に居たなんて……信じられないですよ」
未だに先ほどまでの出来事が信じられなかった、まるで白昼夢でも見ていたかの様に思えた。
（白昼夢……そっちから来たのかも……）
取材の中で白昼の幽霊の目撃情報は、時間を問わずにあったと噂されていた。最初は別な理由を考えたが、もしかしたら白昼夢から付いた名前なのかもしれない。現実に体験した手前、そちらの方がしっくりくるなと思えた。

「居ただろ、セーラー服の女の子が」
悔しそうに辺りをきょろきょろと窺っていた直也が応えた。
急に居なくなったことがよほど残念なのだろう、暫く辺りを見やった後に、大きなため息をついて肩を落としていた。
「……でも写真に写らなかったのは何ででしょうね」
「そうだよなあー、幽霊なんだから写真に写ってくれてもいいはずだよな」
幽霊の姿の映っていないデジカメを菖蒲にぽんと差し出した。それを受け取りバックの中に仕舞う。
（まるで狐に化かされたみたい）
そんなことを思いながら、一人でクスクスと笑い出す。何がツボに嵌ったのかは分からないが、当人にとっては笑いのツボなのだろう。
「……何笑ってんだ」
菖蒲は声に出さない笑いのつもりだったのだが、現実に声に出してクスクス笑っていたようだ。
少し慌てた様子で真顔に戻し、何も無いと言わんばかりに手を左右に振った。
「まあいい、とりあえず戻って記事でも書くか」
直也は窓の外を眺めながらそう言った。
窓の外から差し込む光は、ほんの少しオレンジ色に染まっているように見えた。腕時計を見ると四時半を回っていた。もう暫くすると日も落ちてくるような時間だ。
そろそろ学校を出ないと、幾らなんでも教師に見つかったら問題がありそうだ。
「外で取材は？」
「現物見てるからな、今日のところは取材はいいだろ。　鮮明な印象を覚えてるうちに、ある程度終わらせんぞ」
間髪入れずに直也は菖蒲の意見を切り捨てた。
確かに正論な意見だった為、頷いて納得を示した。それを一瞥し

て直也はこの場を後にしようと歩を進めた。
その姿を尻目に、菖蒲はふと後ろを振り返る。
そこには何も居なかった。だが菖蒲は何か言い知れない感情が込み上げてきた。
恐怖だったのか、感動だったのか、自分でも良く分からない。
（悪い気は……しないかな）
冷静になって考えてみる。自分は幽霊を見たのだ、それは多分一生物の経験なのかもしれない。多分その感動が今の気持ちに表れているのだろう、そう考えた。
しかしこの感情は何だろうか、胸が震え辛い気持ちと懐かしい気持ちで一杯になる。
「おーい、置いてくぞ」
「ちょっと！　待ってくださいよー」
遠くで直也の声がした。その声に反応し振り向く、階段を降りているのだろう、視覚には捉えれない。
菖蒲は未だ釈然としない考えを抱きながら、急ぐように直也を早足で追いかけた。
（気持ちを切り替えよ、何か分からないけど……そのうち分かるでしょ）
この白昼の幽霊は言い表せないが、今までと違う何かを感じ、少なからず興味が湧いた。頭の中に疑問の点を残しながらも菖蒲は学校を後にした。

第１０章　予兆　３（後書き）

読んで頂いて有難う御座います。
もし宜しければ、評価感想部分に手をつけて頂ければ幸いです。

第11章　孤独　1

夢は深い眠りに落ちていた。正確には眠っているわけでは無い、彼女は眠ることなど出来ないのだから。だが意識が途切れ、深い谷底に延々と落ちている様な、そんな感覚が全身を支配していた。

逆らうことは出来ない、いや――逆らうつもりなど毛頭浮かばなかった。何故なら彼女の体がそれを周期的に必要としているのだから。

そんな中で夢は懐かしい感覚を覚えた。

誰かが自分に優しく触れている。

それは微々たる感覚だった。しかし夢には忘れることも出来ない、とても懐かしい感覚だった。

（お姉ちゃん……）

無意識の中で言葉が紡ぎ出される。少し歳の離れた気の強かった姉のことが一瞬脳裏をよぎった。

深い眠りから徐々に目が覚めるような感覚に襲われながら、夢は涙を流していた。

目を開けながら顔を上げる。そっと手を頬に当てる。

「なんだろ……思い出せないや……」

無意識の中で味わった思いは、今ここにある夢の意識には残っていなかった。

ただ奇妙な名残惜しい感覚と、頬を伝っている涙だけが残っていた。

（来る――）

意識がはっきりとしだした時だった。薄い膜を超えるように、誰かがこの場所へ入り込んでくるのを感じた。

もう何度目かの感覚だった。最初は気持ち悪さも感じたことはあった。しかしそれが何を意味しているのかを理解した時、早く来な

いかと待ち遠しく思えるようになった。
それはこの世界の枠を超えた証拠なのだから。
（何処に出たのかな……）
夢は神経を集中させて彼が居る位置を探った。この世界の事象なら手に取るように知ることができるし、全ては思いのままだ。唯一、彼を除いて――
（こっちかな）
外部からの異物である彼を補足するのは造作も無かった。彼の位置を把握し、そこへと跳躍する。
距離という概念など無意味だ。
刹那、視覚で彼の姿を捉えた。
まだこちらには気が付いていない、呆然と立ち竦んでいた。意識して彼の死角へと飛んだのだから気が付かないのは当たり前だが、夢はそれを確認すると悪戯っぽく微笑んだ。
少し恥ずかしがるような素振りをしながら、音も無く彼の背後から、ゆっくりと歩を進めながら近寄っていった。
「わー！」
大きな声を上げ、驚かすように彼の背を両手で押した。ビクッと肩を震わせる様子が、とても可笑しく見えた。
声に出さず笑っていると、彼はゆっくりとこちらへと視線を向けた。
「なんだ……夢か」
ほっと安心したような表情を向け、夢の傍に寄る。なおも笑っていると、吃驚させた復讐と言わんばかりに意地悪な顔で、夢の頭に手をやり髪の毛をぐしゃぐしゃと掻き乱すように撫でる。
「ごめんごめん、やめてってー」
頭を掻き撫でられ、髪の毛がぐしゃぐしゃになった。くすぐったいような感覚が妙に気持ち良かった。言葉では嫌々と言いながらも、声色は喜びに満ちていた。
「はー……ふぅー」

掻き撫でる手も止み、夢は笑い疲れてくたりとその場に座り込んだ。
「吃驚したよ、ほんと」
やれやれと肩を竦ませて、彼も夢の横へと並ぶように腰掛けた。
「あははは、歩ったらビクッとしてて可笑しかったー」
「誰だって驚くよ、あんな事されたら」
歩の肩を震わせていた姿を思い出すと、再度笑いが込み上げお腹を抱えた。歩はその姿を横目に呆れたようにぼそっと呟き、笑みを夢に向け、一緒になって笑った。
彼、弐門歩がここに度々訪れるようになって、幾日が経ったのだろうか。
歩は何度もこの世界に来てくれた。夢には時間の感覚は全く無い為、理解することは出来ないが、多分毎日来てくれているのだろうと思った。
どうやってここに来ることが出来るのかは分からないが、そんなことは夢にとってはどうでも良かった。それ以上に自分以外の存在である歩が、自分の傍に居てくれることが嬉しかった。
「今日はなんかいつもと違うね、辺り一面真っ白で何も無い」
「何も用意できてなくって…ごめんね」
歩の率直な感想に、思わず謝ってしまった。
歩がここに来る様になってからは、色々と歩が見たことも無いような何らかの世界を構築していた。好かれたいという気持ちがそうさせていたのだが、自覚はしていなかった。
「いやいや、こういうのも不思議な感じで好きだよ」
夢にとってはいつも見ている寂しい世界だった為、後ろめたい気持ちがあった。歩にはそうでもないらしい、興味深々に辺りを観察している。ほっとしながら、歩の無邪気な表情を眺める。
「……こういう事も出来るんだよ」
すくりと立ち上がり、得意げな表情で歩に見せびらかすように夢は歩いた。ただ歩いたわけではない、重力が違う方向に働いている

様に、まるでそこに地面があるかの如く夢は垂直に上へと歩いた。
「……へー」
歩は感心するように視線を徐々に上げて夢を追った。夢はその歩をからかうように今度は更に直角に方向を変え、逆さまになった。丁度歩の後頭部と夢の後頭部の位置が重なる。まるで歩が夢の姿で写る鏡が上にあるかのように。
「どう？」
夢は頭上で座っている歩を見つめながら、誇らしげに構えた。
歩も立ち上がり真似をしようと試みている。しかしここは夢の世界であり、歩の世界では無い。当然出来るわけも無いのだが、歩も先ほどの夢と同じように垂直に歩いた。
「おー、俺も出来た、見てよーほら」
実のところ、夢が彼の歩きに合わせて重力や地面を作っていたのだが、歩にはそれを知る術は無い。夢はというと歩に喜んでもらったのが嬉しいのか、吃驚した表情を見せてぱちぱちと軽く拍手を送る。
（良かった、喜んでくれてる）
歩がこの世界に来てからというもの、夢は安らぎと同時に強い不安も感じていた。歩が自分を嫌いにならないか、そうなったらもう二度とここに来なくなるかもしれないと。
とても長い間、夢はこの世界で独りだった。最初はただずっと嘆いていた。ここは何処なのだろう、何故自分はここに居るのだろうと。
答えは今でも出ない。だがこの世界で生きているうちに、夢はこの世界がどういうものなのかある程度ではあるが理解できた。
この世界は自分の意志を反映してくれる。ここでは自分は神も同然の能力がある。ただ一つ、自分以外の誰かを作り出すこと以外は――
人という存在を作り出そうとしたことはある、しかしそれは意思を持っては居なかった。夢の意思でのみ動くことが出来る。言わば

操り人形のようなものだった。オートで動くようにしてもそれはあくまで画一的なパターンしか持ってはおらず、本当の意味で人間とは程遠かった。

「夢、これってどうなってんの？」

歩は疑問を浮かべながら、夢の頭の真横に立ち、上を向き夢に話し掛ける。

「ふふふー、内緒ー」

少し意地悪に答える。本来夢の力に寄るものなのだが、上手い言い訳も思いつかず、曖昧にごまかそうとした。

「そっかー、まあいいか」

さっぱりした性格なのだろう、夢は歩のことをそう思っていた。細かいことは気にしないし、この世界にも違和感無く溶け込もうとしている。夢自身にも大らかに付き合ってくれ。そんな歩に安心を覚えていた。

この世界で初めて出会った他人、それでいて安心出来る他人。そんな歩に夢はほのかな恋心に近い物を、日が経つ度に強く抱いていた。

第１１章　孤独　１（後書き）

読んで頂いてどうも有り難う御座います
もし宜しければ、感想評価部分に手をつけて頂けると嬉しく思います。

第12章　孤独　2

（なんとなくコツが分かってきた）
この空間での移動にも慣れ始め、彼は正に縦横無尽に動き回っていた。移動したい地点を地面と捉え移動することで、重力の法則が一瞬で変化をしているのだと考えた。
稀に上手くいかずに落ちそうな感覚に襲われることもあったが、それはイメージが足りないからだろうと方向転換の際は慎重に移動した。
「ねえ、歩…」
ふと、下方から夢の声が聞こえた。足元を覗くと、少し遠巻きに夢の姿が映った。
声自体は少し押し殺したような声に聞こえたのだが、まるですぐ近くで言われたかの様にはっきりと聞こえた。
「どーしたー？」
夢の姿が遠くに見えた為、声色を大きくして返事を返した。
「……ううん、何でもない、気にしないで」
夢は何かを隠すように話しを一方的に切った。
歩はそうかと返事を返した。違和感は感じたが、気にしないことにしていた。これは自分の夢の世界なのだから。
夢の世界だと思っていながらも、彼女と居ると時折生々しい感じを覚えた。それは夢という存在の御蔭なのかもしれない。
彼女と会話をすると、まるで本当に生きている人間と話しているかのような。そんな気になることがあった。
この世界こそがまるで現実だと言わんばかりのリアリティ、それでいて非現実的な事象が幾つも存在している。
彼女が居る夢は今まで見たどんな夢よりも楽しかった。
「傍に行ってもいいかな……？」
呟くような夢の声が今度は耳元から聞こえた気がした。咄嗟の事

に驚き、左右を振り返ったが近くに夢の姿は無かった。
「いいよ、ってかそういう事気にしないでもいいって」
返事を返すと、瞬間――瞬きをするような合間に、視界の中に夢の姿が現れた。
（どうやるんだろ）
歩はさして驚きはしなかった。それ以上にどうやってその行為を行ったのかが気になった。
頭の中でイメージをして瞬間移動を行おうと思っては見たが、一瞬の移動というのに具体的なイメージが持てず頭を抱えた。
「うん、ごめんね、変なこと聞いちゃって」
先ほどの返答なのだろう、歩の正面に来た夢は、俯きながら言った。
（可愛いとこもあるよな）
無造作に俯いている夢の頭に手をやり、よしよしと慰めるように撫でた。
普段元気に歩を先導してはしゃいでいる夢だが、時折今のようにしゅんと落ち込むような時があった。
何を気にしているのかは歩には全く分からなかったし、そもそも考えたことも無かった。
ただ、妙にしおらしくなるところが、人間的で可愛いと思うだけだった。

暫く落ち込んだ夢に寄り添うようにしていると、次第に元気を取り戻したのか、夢の顔が笑顔になっていった。
「…ありがとね」
笑顔を取り戻した夢は、照れ隠しをしながら言った。
（こんな表情（かお）もするんだよな）
最初に出会ってから、幾度もこうして彼女と夢の中で出会っている。その度にこの世界の異質さと、夢の人間味のギャップを強く感じた。

夢自身はあたかも生きている人間と全く変わらないように見える。
悪戯をすれば怒るし、泣く事すらあった。その度に歩は夢に対して謝ったりもした。
「……よく出来てるよね、ほんと」
つい、ぼそりと本音が漏れる。
夢はこちらの方を向き、何のことか分からないと言いた気に首を傾げた。
「いやさ、夢の中の人間なのに、現実みたいにリアルだなって」
夢にこんなことを言ってもしょうがないとは思いながらも、現実と大差が無い為深い考えもなく言った。
笑顔が一転し、サッと血の気が引くように、夢の顔が無言で固まった。
（さっきの瞬間移動どうやったのかなあ）
歩はそんな夢の表情の変化には全く気がつかず、周りの変わらない風景を見ている。
「……歩……私……」
カチカチと奥歯を鳴らすように、小声で呟く。歩には聞こえてはいないのか、夢への関心を失っているように、辺りを眺めて呆けていた。
（飛ぶイメージ？　かな…でもそれだと浮遊とかになっちゃうよな）
頭の中で何度も、瞬間移動のイメージをしてみるが、やはり上手く固まらない。また別の機会に試してみようと、今回は残念そうに諦めた。
ふと隣を見やり、やっと隣で夢が声にならない声で、呟いているのに気が付いた。
「どしたの？」
俯いている夢の姿が目に入り、また何か機嫌を損ねさせてしまったのかと思った。心配半分の面持ちで、言い訳を考えながら様子を窺う。
返事は返ってこない。

（ピピピピピピピピ――）
突然頭の中から電子音のような物が聞こえてきた。
一瞬何の音なのか分からなかったが、すぐにそれがどういうものなのか理解できた。
「……ゆむ……たし……てるから」
夢は何かに気が付いたように、慌てて顔を上げ、歩に何かを言っている。
だがはっきりと喋っているはずなのだが、歩は全てを聞き取ることは出来なかった。
歩はもう何度も体感している現象だった為、これが何であるか理解出来るようになっていた。
目覚めの時なのだ、夢が覚めリアルへと帰る時間が来たのだ。徐々に五感が失われていくのを感じる。
（携帯の目覚しかな……）
虚ろに遠のくような意識になりながらも、その音が何かを的確に理解した。
夢を見やると、影るようにぼんやりと映っていた。
必死に何かを言っているように見える。しかしその言葉はもう殆ど薄れて聞こえる。
（夢、ごめんね。　また今度ゆっくり聞くからさ、またね）
自分の台詞が声になったか分からないが、夢に別れの挨拶を告げた。
意識が事切れる寸前の夢の姿は、まるで泣いている姿のようにも見えた。
ぼんやりとしか見えなかったが、手を伸ばして縋るようにしているように思えた。
瞼は重くすぐに目を開ける気力が湧かない。耳に鳴り響くこの不快な電子音を止めるべく、目深に被った掛け布団の中から、掻き分

けるように携帯を探した。
腕だけを伸ばしおおよその位置把握で場所を特定する。指先が触れ携帯を掴み、目をつぶったまま目覚ましを切る。
次第に意識がはっきりとしていく、携帯で時刻を確認すると夜の九時前だった。
（九時……ああ……）
時刻を確認し、そういえば見たいＴＶ番組があった為、目覚ましを掛けた事を思い出した。
ふう、と軽いため息をつき重苦しく瞼を開ける。
寝ることは好きだが、目覚めのこの感覚だけはどうにも好きになれなかった。掛け布団を避け、布団から上半身だけを持ち上げる。
呆けながら未だはっきりと覚めやらぬ意識の中、今日見た夢を思い返す。
思わず少し顔がにやける。苦笑を洩らしながら、ただ楽しかったことが思い出される。
現実では起こりえない事象を、現実のようなリアリティの中で行えたこと。そのことだけで頭の中が一杯になる。
次はどんな夢が見れるだろうか、そんなことだけを虚ろに思っていた。

第１２章　孤独　２（後書き）

読んで頂いて本当に有難う御座います。

書きながら寝てはダメだと思いながらも、自分自身が夢の世界にフォールダウンしました。

しかしどんな夢を見たのかはっきりと思い出せません。

でもなんとなく楽しかったのを覚えています。多分……

第13章　亀裂　1

月明かりと街灯の明かりだけが薄っすらと道を照らしている。薄暗い夜道を菖蒲は独り歩いていた。辺りに住宅が幾つもあるが、その殆どから明かりは漏れてはいない、寝静まっているのだろう。その為か周囲からは雑音も殆ど無く、不気味に思えるほどに静まり返っていた。

溜まっていた仕事を残業して終わらせていた為、帰りがこんな時間になってしまった。仕事がある程度片付いた時には、もう日付も変わりかけていた。

いつもの見慣れた帰路を歩いていると、ふと気が付いたようにある建物が目に入った。

（貴船（きふね）小学校……懐かしいなあ）

それは菖蒲自身が昔通っていた小学校だった。余り大きな学校ではなく、住宅地の中に隠れるように佇んでいた。閉じた正門からすぐ駐車場とグラウンドが見える。

過去に苦い記憶も多かった為、見かける度に虚ろな気分になっていた時期もあったが、今は思い出として懐かしめる余裕は出来た。

（ちょっとくらい……いいよね）

きょろきょろと辺りを窺い、誰も居ないことを確認する。こんな時間に誰かが居る訳も無いだろうが、見られたら余り良い気はしないので本能的に行った。

誰も居ないことを確認すると、閉じた正門の柵に攀じ登った。柵は菖蒲の胸ほどの高さで、登るには苦労はしなかった。

校内に入ると、薄暗さは一層増したようにも感じた。街灯の光も遠巻きに見えるだけで、校舎の影や植えられた木々の御蔭で月明かりも薄れている。

（変わってないなあ……）

塗装の剥がれかけてる遊具、古ぼけた飼育小屋、それら全てが昔菖蒲自身が通っていた頃と変わらないまま残っていた。
グラウンドを抜けて、校舎の方へと歩いていく。
グラウンドと校舎の間に大きな銀杏の木が1本聳え立っていた。
（この銀杏も、まだ残ってるんだ）
この小学校のシンボルとも言える大きな木だった。敷地の丁度中心部分に存在していて、三階建ての校舎よりも背が高い。
昇ってみようと小さい頃思ったことはあるが、断念した記憶がある。
薄暗い小学校は、恐怖の感情など全く感じさせず、懐かしさと暖かささえ感じることが出来た。
（あの子も…卒業してすぐだったんだよね）
菖蒲は歳の離れた妹が居た。もはや過去の思い出である。
高校生の頃、歳の離れた妹と両親が数週間の間に別々に交通事故に遭い、両親と妹は共に死亡したと聞かされた。妹はこの小学校を卒業したばかりだった。
菖蒲は独り残され、近くに住んでいた親戚の養子になった。
親戚夫婦は昔から近所に住んでいた為、その中に溶け込むのもさして苦労は無かった。むしろ実の親のように親身に接してもらい、辛さも徐々に薄れていった。今でも薄給の為、その親戚の家に食費等を入れてお世話になっている。
妹や両親が事故で他界した時は悲しかった。特に妹は歳が離れていたので、喧嘩も無く大事に可愛がっていた。その為、空虚さが心を埋めた時期もあった。
感慨深くなり、薄っすらと瞳が潤んだ。ぶんぶんと軽く頭を振り、忘れようとする。
ゆっくりと校舎の周りを練り歩く、何もかも変わらなく思える風景だ。
中庭に差し掛かったとき、ふと視界に何かを捕らえたような感覚

に襲われた。
（あれ？　なんだろ……以前にも……）
以前襲われたことのある感覚に驚き、注意深く辺りを窺う。しかし何も見当たらない。
（あの時と同じ……？）
それは白昼の幽霊と最初に出会ったときに感じたものと同じ感覚だと思えた。もしかしたら何処かにあの少女がいるのかもしれない、そう思い菖蒲は注意深く観察した。
ただでさえ薄暗い夜に、校舎の間にある中庭はほんの少しだけ刺す月明かり以外、何も明かりが無く所々闇に覆われていた。
何処かの影にいるのかもしれない、そう思いながら、ゆっくりと隈なく歩いた。
突然――――
キィンと頭に劈くような高い音が響いたように感じた。
（――っ！　何…これ……）
一瞬酷い頭痛のような感覚に襲われ、膝を付いて頭を抱えその場にうずくまる。
鼓膜が裂けたかと思うような感覚に、暫く視線を保つことすら出来なかった。俯いたまま、その感覚が収まるのをただ待つことしか出来なかった。
徐々に頭の感覚が和らぎ頭痛も治まった、一瞬の出来事だったが、気が遠くなるような長い時間にも感じた。
うずくまったまま、未だ視線が上手く定まらない。顔を上げ頭を振りながら、ピントのずれた視界を晴らしていく。
（あ……あの子）
焦点が定まった視線が真っ先に捉えたのは、あの時のセーラー服らしき服装の白昼の幽霊の少女の姿だった。校舎の陰に隠れるように、少女は独りそこに居た。
顔は見えた訳では無いが、あの透き通った外見は見間違えようがなかった。あの時とは違い、うずくまった姿勢のまま、小刻みに震

えている。
重い頭を上げ、立ち上がる。菖蒲はゆっくりとした足取りで、少女の傍へと歩み寄っていった。
（苦しんでる？　ううん……泣いてるの……かな）
少女の姿は辺りの暗闇に溶け込むように見える為、傍に寄ってもはっきりと見て取ることが出来なかった。
しかし震えるような肩、俯き加減、それらが菖蒲には悲しみに暮れている姿のように思えた。
「……どうしたの？」
思わず声を掛けてしまう、しかし少女からは何の返答も無い。そんな少女の姿がいたたまれなく、すっと手を差し伸べようとした。だが手は少女の体を捉えれず突き抜けてしまう。仕方なく何も無い場所で固定するように、少女の肩の部分にそっと手を置いた。
こうしていると、少女の泣き声が今にも聞こえてくるようだった。少女は手を顔に当て、時折涙を拭うような素振りも見せた。カチカチと唇を震わせ、その透き通った姿が弱々しさを強調させているように、今にも消え去りそうだった。
（あの子も……こんな感じだったかな……）
歳の離れた妹のことを思い返す。曖昧にしか思い出せないが、丁度この位の年齢だったと思う。
感情の起伏の激しい子で、良く両親に駄々をこねては困らせていた。物事が上手く行かない度に、部屋の隅でうずくまって泣いていた。
そんな妹をいつもそっと手を差し伸べて、慰めていたことを思い出した。

第14章　亀裂　2

少女が零した涙を拭う素振りを見せながら立ち上がる。突然の動きに驚き、少女の姿を追い視線を上げた矢先だった――――

キィンと、再度何かが頭を突き抜ける。

痛みと神経を逆撫でするような不快感に襲われながら、抗えず頭を抱えうずくまる。

徐々にぼやける視界の中で、暴れるように動く少女の姿を薄っすらと捉えた。頭を掻き毟り、地団太を踏む。癇癪声を上げるように口を大きく開け、焦点の定まらない物憂げな表情をしていた。

（また……！　何なの…）

必死に思考をめぐらすが痛む頭に邪魔をされ即座に霧散する。少女が駄々をこねるように暴れる度に、甲高い痛みが頭を幾度も突き抜けた。何が起こったのか分からない、考えることなど出来ず、薄れそうな意識を保つだけで精一杯だった。

先程とは違い痛みが何度も駆け巡った。時には二度三度と連続で襲われ。頭が今にも張り裂けそうだ。

突然周囲から、パリーンと高い音が複数聞こえた。視線だけを探るように周囲を一瞥する。校舎のガラスが何枚も次々に割れていた。

「くぅう……ぅ……か…ぁ」

徐々に激しくなる痛みに耐え切れず、菖蒲は頭を抱えながらその場にぐったりと倒れ込んだ。呻き声を上げながら、胃液が逆流しそうな嗚咽を繰り返す。目尻に零れ落ちそうな涙が溜まる。じたばたと溺れるようにもがき、中庭の土に爪をたてる。

胃液の逆流に耐え切れず嘔吐する。何も入っていない胃からは、ただ粘膜のような胃液だけが零れ落ちる。喉に熱い痛みを感じ続け、それを全て吐き出す。

今にも糸が切れて崩れ落ちそうだった。息を荒げ必死に抵抗をする。この場から逃げ出そうと這いずるが、前に進めているのかは分

からなかった。
（も……ダメ……）
這いずる気力すら失い、ギリッと奥歯を噛み締め痛みに耐える。
「はぁ……はぁ……」
どの位この痛みは続いていたのだろうか、意識も失いかけた時、痛みが和らぐ感覚が徐々に全身に広がっていった。
すぐには理解することが出来なかった。痛みが消えたのがいつなのか理解できず、次第に軽くなってきた体を寝返りを打つように動かし、虚ろに空を見上げた。
未だ荒げる吐息と、酷い二日酔いに掛かったような頭が重く圧し掛かってくる。
首だけを動かし辺りを見やる。少女の姿はもうそこには見当たらなかった。
見える限りの校舎のガラスが殆ど割れている。
（何だったんだろう……）
まだ靄の晴れない頭を抱えながら立ち上がりる。
頭に響いた感覚、割れたガラス、白昼の幽霊、断片的に頭に浮かぶが、それ等を繋がりにするには些か情報が不足する。

第１４章　亀裂　２（後書き）

短い更新かつ、約１ヶ月ぶりの更新です。
コツコツ頑張ります。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4690c/

ユメアルキ

2010年10月10日07時53分発行